文部科学省 地(知)の拠点

地域連携共同研究所年報
第２号

地域連携共同研究所年報 ―第２号発刊にあたって　学長　志村二三夫 ……… 1

食育で育む管理栄養士の専門性 ―大学COC事業との連携事例（第2報）―
長澤　伸江、井上久美子、岩本　珠美、木村　靖子、西川　和美、鈴木　香 ……… 3

「十文字学園女子大学シニア健康教室」の実践と検証（第2報）
高橋　正人、池川　繁樹、長尾　昭彦、木村　靖子、高橋　京子、飯田　路佳
德野　裕子、佐々木菜穂、石山　隆之 ……… 13

「新座・地域ケアのつどい」の取り組みについて（第2報）
太田眞智子、野島　靖子、山口　由美、富井　友子 ……… 25

ワークショップによる合意形成の手法の開発とまちづくりサポートのスキーム構築に関する研究
松永　修一、山田　陽子、福島　聡 ……… 39

小児における食物アレルギーに関する意識調査と実態調査
松本　晃裕、目黒　美葉、永倉　俊和、山﨑　芳江、名倉　秀子 ……… 45

新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導
岡本　節子、松本　晃裕、長澤　伸江、福田　平、佐々木亮太
肥沼　謙、柴山　桂、石山　隆之、池川　繁樹 ……… 47

地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み
野島　靖子、名塚　清、太田眞智子、山口　由美、富井　友子、二瓶さやか ……… 51

〈寄稿〉
「想いの共有」から始まる大学の地域“共創” ―当事者意識が“心の種火”を自信に変える―
福島　聡 ……… 61

編集後記 ……… 65

十文字学園女子大学
JUMONJI UNIVERSITY

地域連携共同研究所年報 ― 第２号発刊にあたって

学長　志村 二三夫

地域連携共同研究所年報　第２号をお届けします。

本学は短期大学の設置以来半世紀以上に亘り、地域に根ざす大学として、地域社会との連携協力につとめ、地域の皆様に支えられ、地域とともに発展してきました。長年にわたるこうした地道な歩みをベースに、本学は平成26年に文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（COC事業）」に“新座市をキャンパスに！＋（プラス）となる人づくり、街づくり”というテーマで採択されました。このCOC（Center of Community）事業採択を受けて、地域における知の拠点として地域の諸問題に関する学術研究を通じ、本学および地域社会の発展に寄与することを願い、また目的として、地域連携共同研究所は設置されました。

ところで、日本語の「地域」はもともと、英語のareaやregionに当たり、区切られた土地や土地の区画を示す素っ気ないことばです。しかし、community（共同体）との出会いで地域は活性化されます。堅めの定義では、地域コミュニティは、「一定の範囲で地理的に広がりもしくは関連があり、設立趣旨および目的、経済活動、生活慣習等の面で共通の利害を有し、構成員である個人との間で相互に影響を与え合う集団や組織のこと」（山内一宏：立法と調査 2009.1 No.288）とされています。よりソフトには、地域コミュニティは、「地域住民が生活している場所、すなわち消費、生産、労働、教育、衛生・医療、遊び、スポーツ、芸能、祭りに関わり合いながら、住民相互の交流が行われている地域社会、あるいはそのような住民の集団」（Wikipedia）とされています。

いずれにしても、地の拠点の「地域」は、区切られた土地といったものではなく、人と人の間の関係によって形成される地域コミュニティであると思います。地域コミュニティは、生活に関する相互扶助（子育て、教育、健康づくり、福祉、防災、冠婚葬祭等）、伝統文化の維持等（工芸、祭、遺跡等）、行政の補完機能（行政との連絡、交通安全、生活環境の整備、道路の補修・清掃等）、地域全体の課題に関する意見調整（まちづくり、治安維持、山林保全、防災等）、世代間交流等の様々な価値ある役割を果たしてきました。しかし、少子・超高齢社会が現実となり、都市化の反面で過疎化が進む中にあって、放置すれば衰退の方向に向かう地域コミュニティの課題解決・活性化に、教育研究をとおして少しでも寄与することが、地域コミュニティに支えられている本学の務めです。

研究所では、このような観点から、学科、専門領域、組織といった従来の境界を超えた相互の連携・協力体制を構築し、大学の教育・研究と地域社会をつなぎ、産官民学連携、生涯学習、学生の地域貢献活動などを総合的に推進することをめざしています。分野横断的な研究を奨励、支援するとともに、成果を地域社会の発展と本学の教育、研究の深化に役立てていきます。とくに、研究所のプロジェクトは、“新座市をキャンパスに！＋（プラス）となる人づくり、街づくり”を合言葉として、地域を学ぶ、地域で学ぶ、地域に活かすという視点で取り組む学生達によって支えられています。翻って、学生達は地域活動をとおして、地域の皆様を先生としてしっかり成長し、社会人基礎力を高めています。

本年報（第2号）は、このような研究所の活動成果の一端を取りまとめたものです。

食育で育む管理栄養士の専門性　―大学COC事業との連携事例（第2報）―

Expertise of registered dietitian to nurture in food education
－Cooperation example of the University COC business（the 2nd report）－

長澤　伸江 1)　井上久美子 1)　岩本　珠美 1)
Nobue NAGASAWA　Kumiko INOUE　Tamami IWAMOTO

木村　靖子 2)　西川　和美 3)　鈴木　香 4)
Yasuko KIMURA　Kazumi NISHIKAWA　Kaori SUZUKI

1) 十文字学園女子大学・食物栄養学科　2) 十文字学園女子大学・健康栄養学科　3) 新座市保健センター　4) 水野学園

キーワード：　管理栄養士養成　食育　行政　連携・協働　専門性の醸成

要旨：「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトでは、管理栄養士をめざす学生を対象に、ワークショップやファシリテーションの基礎力を養う講座を開設し、その後、新座市保健センター栄養士からの連携・協働の要望に基づき、課題解決に向けて保健センターが企画した地域住民を対象とする事業に学生が参画した。行政を中心とし地域社会と連携・協働した事業に学生が参画することは、管理栄養士の専門性の醸成の一助になると考える。

1. はじめに

文部科学省の「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」[1)]は、大学等が自治体を中心に地域社会と連携し、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題（ニーズ）と大学の資源（シーズ）の効果的なマッチングによる地域の課題解決を視野に入れた取り組みを進めるものである。一方、管理栄養士養成校のカリキュラムでは、「管理栄養士・栄養士として専門的知識や技術を向上させたいと思う態度」、「食をとおして人々の健康と幸せに寄与したいと思う意欲」を養う体験が求められている[2)]。そこで、「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトでは、新座市の課題解決に向け保健センターが企画した地域住民を対象とする公衆栄養活動に学生が参加する機会を設けた。いくつかの企画は平成27年度からの継続的な取り組みとなったが、28年度は新たに、小学校教育委員会からの依頼を受け、学生が小学生対象の食育講座を担当した。また、企業からイースターイベント用レシピ提供の依頼があり、連携・協働する機会を得た。さらに地域町内会からの要望を受け、高齢者の健康講座と簡単レシピの実演試食会を開催した。地域社会と大学・学生が連携・協働した実践的な事例を報告する。

２. 活動報告

管理栄養士をめざす学生が、食育コーディネーターからワークショップやファシリテーションの講義を受けて基礎力を養い、その後、行政栄養士からの連携・協働の要望を聞き、新座市、和光市、墨田区等で開催される地域住民に向けた食育事業に参画した。

①墨田区食育イベントで食育ポスター制作・掲示、子ども豆腐手作り教室のアシスタント、食育推進計画策定のためのワークショップ参加（6月18日）。

②新座市立東野小学校夏休み食育授業担当（8月8日～ 10日）。

③和光市まちかど健康相談室で高齢者と子どものための食育授業担当（8月23 ～ 25日）。

④新座市主催の「食育講演会」（講師：東京會舘鈴木直登氏による調理実演と試食）本学で共同開催、教員と学生がアシスタントを務めた（9月3日）。

⑤学生が「食育で育む管理栄養士の専門性」ロゴを考案、Tシャツにプリントして活動時に着用。

⑥「新座市民健康まつり」にボランティア参加・骨密度測定コーナー開設（10月16日）。

⑦新座市「食育の日」に展示する食育推進ポスター制作、市役所・保健センターにて展示（10月18日）。

⑧新座市保健センター健康診断時に配布する骨粗鬆症予防リーフレットを考案。700枚印刷し提供。

⑨新座市「親子DEミニウォーキング＆スタンプラリー」参加賞のオリジナルストラップを手作り、スタンプラリーのクイズを出題（11月12日）。

⑩新座市産業経済課のＨＰ掲載用、野菜を使ったレシピ提供（年4回）。

⑪新座市野火止四丁目上町内会の依頼による高齢者のための健康講座と簡単レシピの実演試食会を開催（3月8日）。

⑫イオン川口前川店の依頼を受け、イースターにちなんだプリンレシピ提供（3月30日）。

＜事例報告1＞

墨田区の食育イベントに食物栄養学科の学生が参加（長澤教授・長澤ゼミ担当）

平成28年6月16日（木） ～ 19日（日）に開催された墨田区の食育イベント「手間かけて すみだ食育 てんこもり2016」に食物栄養学科の長澤ゼミが参加しました。

（1）食育ポスターの制作・展示

3年ゼミ生9名は、5月の連休明けから、一般社団法人「すこやか食育エコワーク」の藤田誠一氏の指導によりファシリテーションの技法を学び、自分の自由な発想を発言し、その意見を集約していくグループワークを体験しながら、食育ポスターの構想を練ってポスターを完成させました。

墨田区役所１階のアトリウムに展示したポスターのタイトルは、「それではみなさんごいっしょに、いただきます!!」です。テーマは、「食品の流通」で、自分たちの手元にどのように食品が届くかを、毎日食べているお米、肉、魚、野菜などが食卓に上るまでの生産者からの流通過程を絵で示し、「残さず食べようね」と呼びかけました。また、子供が興味をもてるよう、ポスターと同様のカードを作成し、食品の流通に関するゲームができるようにしました。

【学生の感想】

ポスター制作に関しては、テーマ決めからスタートし、たくさん試行錯誤を繰り返しました。食の大切さを伝えることは想像以上に難しく、どうしたら分かりやすく伝わるかということについて、仲間とともに意見を出し合い、お互いの意見を尊重しながら進めていきました。ポスター内容は、食への感謝の気持ちをもってほしいというテーマを伝えるために、家庭から出る食品ロスや、食の流通について書きました。たくさんの方々に見ていただくことができ、達成感を得ることができました。展示担当の方に、「子供たちが、一生懸命パズルを完成させていましたよ。頑張っていました」と教えていただきました。子供たちにも食品の流通や食べ物のありがたさが伝わっていれば幸いです。

（2）食育体験・豆腐づくりのアシスタント

3年ゼミ生9名は、三善豆腐工房の平田省吾氏が開催するイベント「食育体験・豆腐づくり」のアシスタントをするため、15日（水）に工房を訪れ豆腐作りの手順を学びました。すみだ食育イベントの本番は、18日（土）、墨田文花児童館で幼児から小学生を対象に開催されました。イベントの手伝いとして、主に豆腐作成手順の説明や指示を行いました。また、豆腐作りの際に出たおからを利用し、おからドーナツも作りました。作りたてのお豆腐やおからドーナッツは子供たちに大好評でした。

【学生の感想】

子供たちとのお豆腐作りはとても楽しく、真剣に作っている様子やおいしく食べている様子を見て、子供たちの知りたい、やりたいというような気持ちを大切にしていきたいと思いました。私自身も、大豆から豆腐ができるまでの工程や、にがりについてなど改めて学ぶことができました。食育イベントに参加することで、自分自身様々なことも学べ、とても良い経験になりました。今後も食育活動を積極的に行っていきたいと思いました。

（3）新たな墨田区食育推進計画策定のためのワークショップ参加

18日（土）、墨田区役所２階イベントホールで14時から開催されたワークショップに、4年ゼミ生8名が参加しました。5年ごとに改訂される食育推進計画に住民の夢や想いを盛り込むためのワークショップです。初めて顔を合わせる区民の方や他大学の学生さんと一緒に、「今までで一番幸せを感じた食べ物」を書き出し、その思いを共有する体験をしました。

【学生の感想】

幅広い世代の初対面の方々とのワークショップに参加するのは、初めてであったため、最初はとても緊張しました。しかし、“今までで一番幸せを感じた食べ物”をテーマにしたアイスブレイクのおかげで緊張が解け、楽しくお話をすることができました。それぞれの食に対する思い出は様々であるにもかかわらず、どこか共通点があることに気がつきました。それは、違う世代であってもそれぞれ『食』には、人と人との繋がりの思い出があることでした。大学での授業の際に、『食』を通して人と人を繋ぐことができるということを学んでいましたが、今回のワークショップを通して『食』には人と人との繋がりがあることを改めて実感することができて大変良かったです。『食』の素晴らしさは、思い出の『食』を食べるときに、また人との繋がりの思い出を思い返すことができることだと思いました。

＜事例報告2＞

新座市「食育講演会」を本学で共同開催（木村教授・食物栄養学科学生協力）

平成28年9月3日（土）、東京會舘和食総調理長 鈴木直登氏による新座市「食育講演会」が開催されました。新座市保健センターと地域連携共同研究所「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトとの共催事業として、食物栄養学科、健康栄養学科の教員と学生が協力して実施したものです。

新座市では、新座市食育推進計画に基づき、市民の食育への関心を高めるため、毎年「食」に関わるさまざまなジャンルの専門家による講演会を実施しています。今年度のテーマは「プロから学ぶ子どもに伝えたい和食の魅力」として、子育て世代の方を対象に募集し45名が参加しました。参加者の皆さんは鈴木先生のお話に深く聞き入り、熱心にメモを取る方や先生の鮮やかな調理作業の様子、完成した手仕事の料理をカメラ等で撮影される方がたくさんいらっしゃいました。長年のご経験と技術のみならず、和食について幅広い知識に基づいた鈴木先生のお話は非常に興味深く、参加者が聞き入っていたのが印象的でした。飲料水と水道水の違いの話に始まり、箸の話、食材を清めること、食べ物のありがたみを感じること、季節に応じた食材の食べ方、引き算の日本料理の話、日本の風土から生まれた食文化の話等、盛り沢山の内容を、鈴木先生の包丁さばきを目の前で見せていただきながら、お聞きしました。

お話の後、料理の試食をしました。この日のために、鈴木先生が前日から食材を調理して準備してきてくださったものです。参加者はひとつひとつの料理の味を味わっていたようです。盛り付けは食物栄養学科の学生が手伝いました。講演終了後も先生に直接質問される参加者が多数あり、大変充実した講演会となりました。

＜事例報告3＞

「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトの食育ロゴを考案

（井上准教授・井上ゼミ担当）

学生が地域に入り食育活動を行っていくとき、“十文字学園女子大学の学生”であることを地域の方々からすぐにわかっていただけるように、そして、展開する“様々な食育活動”に興味を持っていただけるようにと、オリジナルデザインの食育ロゴを考案し、それをプリントした鮮やかな赤いTシャツをお揃いで着用することにしました。

食育ロゴには、多くのメッセージが込められています。「ニンジンがすくすく育つ新座の大地を背景にして、水色の文字で記された“shoku hug”は、『食で育む』だけではなく『食でまるごと包み込む』意味を含ませています。また、黄緑色の文字は、まず、『しょく』と読みます。その後、よく目を凝らすと2匹のミツバチが濁点に見えてきて、実は『はぐ』とも読めるしかけになっています。つまり、黄緑色の文字を2度繰り返して読むと、『しょくはぐ』になります」。この食育ロゴを左胸元と背中の２か所にプリントしたＴシャツは、「着ると元気になります！」という学生たちの言葉どおり、表情をとても明るくさせます。いい笑顔で、自信をもって、イキイキと地域の方々へ語りかける食育活動につながっています。

＜事例報告4＞

新座市“親子DEミニウォーキング＆スタンプラリー”に学生がボランティア参加、参加賞のゾウキリンストラップ作りやスタンプラリーのクイズ出題、コース誘導などで大活躍!!

（木村教授・健康栄養学科有志担当）

平成28年11月12日（土）、保健センターの主催の「親子DEミニウォーキング＆スタンプラリー」イベントに、健康栄養学科2年生9人がボランティア参加し、ウォーキングコースを参加者と一緒に歩きながら、クイズの出題や参加者の誘導を行いました。この日を楽しみに集まった子どもたちは、日頃忙しいお父さん、お母さんと一緒におしゃべりを楽しみ、新座の自然に触れながら歩いていました。途中、いくつかのチェックポイントでは学生が出題する「新座市オリジナルクイズ」に親子で答えてゾウキリンスタンプをゲットします。でも、これが意外と難問で、間違えたら罰ゲームとして、親子でスクワットやペアストレッチなど健康エクササイズをします。親子が協力して楽しく身体を動かしていました。ウォーキング終了後は、中央公民館体育室での健康運動指導士中村真奈子先生のご指導のもとストレッチ体操で足や身体の筋肉をほぐしました。

参加賞として、子どもたち全員に新座オリジナルゾウキリンストラップ（プラバン）をプレゼントしました。「かわいい！」という歓声が上がり、大好評でした。このストラップは、学生たちが事前に手作りしたもので、プラバンにゾウキリンの絵を描き、オーブントースターで焼くと、写真のような大きさにみるみる縮んでいきます。ゾウキリンの色塗りに苦労しましたが、少ない授業の空き時間にみんなでがんばって作成しました。

健康運動指導士資格など運動系の資格取得を目指す学生には、このような運動イベントの運営のお手伝いや、中村先生の指導方法などを直接目にすることができ、大変貴重な体験となりました。参加した学生からは、「楽しかった」、「参加者に喜んでもらってよかった」という感想だけでなく、参加親子の立場になってのコメントやイベント運営に関する意見なども見受けられ、このような視点が持てることは、今後学生が各方面で社会的活動をするうえで大変役立つことと考えます。

＜事例報告5＞

食育を通じた地域貢献「新座市民健康まつり」に食物栄養学科が参加

（長澤教授・井上・岩本・長澤ゼミ担当）

平成28年10月16日（日）に新座市保健センターで開催された「新座市民健康まつり」に、食物栄養学科の長澤ゼミは骨密度測定体験コーナーで、岩本ゼミと井上ゼミは健康まつり全体の運営と進行のサポートでボランティア参加しました。

骨密度測定体験コーナー（長澤ゼミ）

【学生の感想】

長澤ゼミ3年生9名が骨密度測定体験コーナーを担当しました。健康まつりは10時から12時までの開催でしたが、オープン前から多く方のご来場を頂き、驚きました。私たちの骨密度測定体験コーナーにも、多くの方が詰めかけ、待ち時間がとても長くなってしまいました。骨強度の機械が１台しかないことに不満を抱いていた方や、お待ちいただく椅子が不足し、座れないで大変な思いをした方も見受けられました。スペースの問題もありますが、受付の位置や並び方などの工夫をしてスムーズに測定ができるように対応する必要があったと反省しました。結果的には2時間で143名の方が測定に訪れてくれました。様々な年齢の方と関わることができ、とても良い経験になりました。測定を行って喜んでくださる方が多く、とても嬉しかったです。今回の経験で、本当に多くの方が健康に関心を持っていらっしゃることを実感し、管理栄養士としての知識をしっかりと身に付け、地域の方々の健康づくりの支援ができるようになりたいと思いました。

＜骨密度の測定風景＞

＜受付風景＞

＜ボランティア活動＞

＜制作した食育ポスターの展示＞

受付・その他（岩本・井上ゼミ）

【学生の感想】

受付の担当をさせていただき、保健センターの人と一緒にパンフレットを配りながら協力団体の様子や管理栄養士さんの働く様子を見ることができました。特に食生活改善推進員の方々の姿が印象的でした。食生活改善推進員の方々もボランティアなのに、とても生き生きしているように感じました。これも管理栄養士さんの人柄や力が影響しているのだろうなと思いました。ほうれん草羹やにんじん白玉などを無料で提供したり、スタンプラリーに参加すると新座の野菜がもらえるなど市民が喜ぶ工夫がされていて、こういう工夫をすることで「食」にも関心を持ってもらえるのだと感じました。両親に連れられて来る小さい子から、おじいちゃんおばあちゃんまで本当に幅広い年代の方たちが参加していて、とても楽しそうでした。1階ではハイハイコンクールを、2階では健康相談や歯科相談コーナー、骨密度や血管年齢の測定をしていて、健康に関心をもってもらう取り組みとなっていました。地域のために働く管理栄養士さんの姿を見て、とても刺激を受け行政栄養士に興味が湧きました。頑張りたいと思います。

＜事例報告6＞

野火止四丁目上町内会の依頼を受けた健康講座（長澤教授・鈴木香講師・長澤ゼミ担当）

平成29年3月8日（水）、野火止四丁目上町内会の第2回健康講座が集会所で開催されました。第1回健康講座は講義のみでしたが、キッチン設備があるので、是非、実演と試食を加えてほしいとの要望を受けて実施したものです。食物栄養学科の長澤ゼミ生5人がアシスタントに入り、午前中に講師と実演の打ち合わせを行い、食材を購入しました。当日の参加者は37名で、年代は70、80歳代が半分を占めていました。

町会長のご挨拶後、講師を長澤が担当し『いつまでも元気で生活するために～簡単に作れて、栄養バランスの良い食事のヒント～』と題して、超高齢社会における健康問題の現状、メタボ・ロコモ予防や低栄養予防のための食事のとり方、ロコトレ（ロコモ予防のトレーニング）や運動について講義を行いました。

その後、講師を鈴木が担当し『一人暮らしの高齢者の食事作りを簡単に！お惣菜アレンジレシピと電子レンジで簡単調理』の実演を行いました。調理台に電磁調理器を準備し、後ろの席の方も実演を見られるように、実演者の手元をビデオ撮影してテレビに映し出す初めての試みも大成功で、「テレビの料理番組みたい」との声があがりました。

学生たちが準備した試食をのせたお皿を受講生に配り、楽しい試食タイム。最後に、講義を聴いて、明日から取り組んでみたいことを選んでもらいましたが、「1日10食品群食べたか記録をつける」、「10分いまより多く体を動かす（散歩など）」、「ロコトレ（片足立ち・スクワットなど）を1日1回やる」、「お惣菜のアレンジを作ってみる」などの回答が多くありました。毎日実践して、健康寿命の延伸に繋がることを願っています。

【学生の感想】

健康講座で私たちは、材料の購入、試食の料理の準備、会場の準備などのお手伝いをさせていただきました。この講座で紹介していたレシピは、材料を切って電子レンジで加熱するだけでできるものや、市販のお惣菜をアレンジして違う料理に作り変えるというものでした。どちらも簡単に作ることができ、市販のお惣菜をアレンジするというアイディアには非常に驚きました。私たちも試食をさせていただきましたが、とても美味しかったです。一人暮らしの高齢者は、料理を作るのが困難であったり、億劫に感じてしまったり、作っても食べきれなかったりと様々な問題を抱えており、今回の講座はそれらを解消する実践的なものであると感じました。

超高齢化が進む中で、高齢者のお食事は、いかに簡単で、栄養がきちんと補給でき、満足感の得られる料理かどうかがポイントだということが分かりました。管理栄養士はこのように、対象者に合わせたレシピやアレンジ方法を考案できる力が必要であると感じました。また、参加してくださった方々がとても熱心に見たり聞いたりしているのを見て、私たちもこのように人を惹きつけることのできる講演をできるよう、努力したいと思いました。

3. 取り組みの成果およびまとめ

永井ら[2)]は、管理栄養士養成施設卒前教育レベルの管理栄養士のコンピテンシー測定項目（職業意識や専門的実践能力、40項目）を開発した。長幡ら[3)]は、管理栄養士養成施設卒業時点の学生6,895人のコンピテンシー到達度を調査し、学生自身によるコンピテンシー到達度の評価を行った結果、1位は「食を通して人々の健康と幸せに寄与したい」で、2位は「管理栄養士としての専門的な知識と技術を向上させたい」、3位は「管理栄養士という職業に就くことを誇りに思う」で、40項目の最下位は「自分は、管理栄養士という職業に向いている」であったと報告している。村井ら[4)]は、実習科目の中に位置付けた地域連携事業「糖尿病フェスタ」に着目し、社会人基礎力と管理栄養士基本コンピテンシーの自己評価の変化から地域連携事業の効果について検討した。その結果、『社会人基礎力の12の能力要素および管理栄養士基本コンピテンシー４ 項目の自己評価はすべて有意に向上した。自由記述には、「知識、技術の不足」などの課題がみられ、地域連携事業「糖尿病フェスタ」は、学生の管理栄養士に対する職業意識を高め、さらなる学びの必要性を認識させる実践であった』と報告している。

文部科学省の「地（知）の拠点整備事業」である大学COC（Center of community）事業[1)]は、地域住民をはじめ、行政、企業、ＮＰＯなど各分野の活動と大学が連携することで、地域課題の解決に役立てることをめざしている。さらに、地域活動を通してコミュニケーション能力を養い、在学中から“社会人力”を備えた学生を育てることが期待できる。「食育で育む管理栄養士の専門性」プロジェクトでは、大学COC事業として学生と行政栄養士、教育委員会、住民、企業等との連携・協働に重点を置いた活動とし、参加した学生からは感想を聞くに留め、コンピテンシー到達度の評価は行っていない[5)]。しかし、学生の感想から、保健センターや教育委員会、企業、住民と連携した大学COC事業は、学生たちにとって、世代を超えた市民と交流でき、コミュニケーション能力を養う貴重な場となった。また、試行錯誤しながら完成させたポスターやリーフレット、試作を繰り返し完成させたレシピ集は、大学で学んでいる知識を整理し、人にわかりやすく

伝えることの難しさを味わうと同時に、人々の健康や幸せのために貢献できたという達成感が得られる貴重な体験となった。和食文化の魅力にふれる機会は、「専門的知識や技術を向上させたいと思う態度」を養う体験となった。行政を中心に教育委員会、住民、企業等、地域社会と連携・協働した大学COC事業に学生を参画させることは、管理栄養士の専門性の醸成の一助になると考えられる。

本活動は十文字学園女子大学地域連携共同研究所の研究費により実施した。また、活動の一部は第5回日本食育学会（平成29年5月13-14日、愛媛大学農学部）で報告した。

＜参考文献＞
1) 地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/ （平成28年6月10日）
2) 永井成美、赤松利恵、長幡友実、他：卒前教育レベルの管理栄養士のコンピテンシー測定項目の開発、栄養学雑誌、70、49-58（2012）
3) 長幡友実、吉池信男、赤松利恵、他：管理栄養士養成課程学生の卒業時点におけるコンピテンシー到達度、栄養学雑誌、70、152-161（2012）
4) 村井陽子、多門隆子、竹山育子、他：管理栄養士養成課程の実習科目の中に位置付けた地域連携事業の効果、栄養学雑誌、74、148-155（2016）
5) 長澤伸江、井上久美子、岩本珠美、木村靖子、西川和美：食育で育む管理栄養士の専門性 ―大学COC事業との連携事例―、地域連携共同研究所年報第1号、3-12（2016）

「十文字学園女子大学シニア健康教室」の実践と検証（第2報）

Practice of "Jumonji University senior health class" and the inspection（the 2nd report）

高橋　正人[1)]　Masato TAKAHASHI
池川　繁樹[1)]　Shigeki IKEGAWA
長尾　昭彦[1)]　Akihiko NAGAO
木村　靖子[1)]　Yasuko KIMURA
高橋　京子[1)]　Kyoko TAKAHASHI
飯田　路佳[1)]　Roka IIDA
徳野　裕子[1)]　Yuko TOKUNO
佐々木菜穂[1)]　Naho SASAKI
石山　隆之[2)]　Takayuki ISHIYAMA

1) 十文字学園女子大学・健康栄養学科　2) 十文字学園女子大学・次世代教育推進機構カレッジスポーツセンター

キーワード：　地域　運動　健康寿命　社会貢献

要旨：健康栄養学科の特性を生かした地域連携事業として、平成27年度より「十文字学園女子大学シニア健康教室」を開催している。「シニア健康教室」により、近隣地域のシニア層の食と運動への意識を変え、運動を習慣化することにより、健康寿命の延伸を目指している。対象は、新座市、清瀬市に在住のシニア世代とし、7月より2月まで、第１土曜日を中心に全8回開催した。内容は、ミニ講義により、栄養、健康、運動の分野で実生活に役立てられる研究成果を参加者に伝え、ストレッチ・ダンスムーブメントでは、音楽のリズムやイメージと融合したナチュラルで心地よい動きを楽しむことができるようにしてきた。ミニ講義と運動を組み合わせたプログラムに対する参加者の満足度は高く、大学の社会貢献活動として十分な機能を果たしている。健康栄養学科の学生が毎回、学生スタッフとして活動を支えている。学生の学びの場にもなっている。

1. 研究の背景と目的

健康栄養学科では、栄養士の資格を元に、健康・運動・教育のそれぞれの分野で活躍できる人材を育成する。健康栄養学科の特性を生かした地域連携事業として、平成27年度より「十文字学園女子大学シニア健康教室」を開催している。超高齢社会を迎え、高齢化に伴う医療費の負担を削減することは、各自治体にとって重要なテーマである。健康栄養学科の特性を生かした本事業は、結果が出るまでに時間はかかるが、近隣地域のシニア層の食と運動への意識を変え、健康寿命の延伸につながっていくものである。近隣自治体に対して本学の果たすべき社会貢献活動の1つであると考える。

2. 研究計画と方法

「いつまでも若々しく、元気で」をキャッチフレーズに、シニア世代の食と健康を支えるプログラムを提供する。対象は、新座市、清瀬市に在住のシニア世代とし、定員を30名に設定する。平成28年度は、開催時期を7月より2月までとし、第１土曜日を中心に全8回開催する。10時から12時までで、2時間に次のような内容を組み込んで実施する。

①計測・体調チェック：血圧、体重、体脂肪率等の計測、体調の確認。
②健康相談：本人の希望を聞き取り、運動強度を判定する。
③ミニ講義：栄養、健康、運動の分野で実生活に役立てられる研究成果を参加者に伝える。
④ストレッチ・筋力トレーニング：運動強度を選択できるよう複数の方法を提示して実施する。
⑤ダンスムーブメント：音楽のリズムやイメージと融合したナチュラルで心地よい動きを楽しむ。

	実施日	内容	担当	参加
1	7月16日(土)	新体力テスト、ストレッチ・チェアエクササイズ	高橋正人 飯田・高橋京子	36名
2	8月13日(土)	ミニ講義(高齢期の体の変化を知ろう) ストレッチ・チェアエクササイズ・ダンスムーブメント	高橋正人 飯田・高橋眞琴	37名
3	9月10日(土)	ミニ講義(健康を支える食品を知ろう) ストレッチ・チェアエクササイズ・ダンスムーブメント	長尾昭彦 飯田・高橋眞	55名
4	10月8日(土)	ミニ講義(運動生活と心の健康を考えよう) ストレッチ・チェアエクササイズ・ダンスムーブメント	高橋京子 高橋眞・徳野	41名
5	11月5日(土)	ミニ講義(高齢期の栄養を考えよう) ストレッチ・チェアエクササイズ・ダンスムーブメント	佐々木菜穂 高橋眞・長尾	32名
6	12月3日(土)	ミニ講義(食生活を考えよう) ストレッチ・チェアエクササイズ・ダンスムーブメント	木村靖子 高橋眞・佐々木	39名
7	1月21日(土)	ミニ講義(生活習慣を考えよう) ストレッチ・チェアエクササイズ・ダンスムーブメント	徳野裕子 高橋眞・木村	40名
8	2月4日(土)	新体力テスト、ストレッチ・チェアエクササイズ	池川繁樹 高橋眞・高橋京	37名

3. 実施状況について

＜平成27年度＞

参加者数

性別	申込数	参加数
男	5	2
女	58	52
計	63	54

参加人数

	1回目	2回目	3回目	4回目
人数	30	34	12	36

参加者の年齢

年齢	人数	割合
～59歳	2	4%
60歳～64歳	15	28%
65歳～69歳	18	33%
70歳～74歳	11	20%
75歳～79歳	7	13%
80歳～	1	2%

参加者の住所

住所	人数	割合
新座市	20	37%
所沢市	29	54%
桶川市	1	2%
北区	1	2%
練馬区	2	4%
杉並区	1	2%

参加回数

回数	人数	割合
1	18	33%
2	20	37%
3	10	19%
4	6	11%

＜平成28年度＞

参加者数

性別	申込数	参加数
男	12	10
女	69	64
計	81	74

参加人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目
人数	36	37	55	41	32	39	40	37

参加者の年齢

年齢	人数	割合
～59歳	2	3%
60歳～64歳	15	21%
65歳～69歳	27	37%
70歳～74歳	13	18%
75歳～79歳	13	18%
80歳～	3	4%

参加者の住所

住所	人数	割合
新座市	36	47%
所沢市	30	39%
桶川市	1	1%
北区	1	1%
練馬区	2	3%
杉並区	0	0%
清瀬市	6	8%

参加回数

回数	人数	割合
1	13	18%
2	11	15%
3	4	5%
4	7	9%
5	11	15%
6	12	16%
7	13	18%
8	3	4%

81名から申し込みがあり、実際に参加されたのは74名であった。男女比は、女性が多いが、男性の参加者も増えてきている。

各回の参加人数は平均40名であった。ほぼ天候が安定していたこともあるが、昨年度の雪の影響を差し引いたとしても、確実に参加者は増えている。

参加者の平均年齢は69.2歳で、最年少が56歳、最年長が82歳であった。参加者の住まいは、新座市が最も多く36名で、清瀬市からも6名の参加があった。近隣市に広報で呼びかけたこと、口コミで情報が広がっていること等が要因として考えられる。

参加回数は、平均4.3回。参加回数は二極化しており、継続できる要因を分析していく必要がある。8回すべてに参加されたのは3名とも清瀬市の方だった。

以下、参加者の感想の中から抜粋する。教室の内容に満足いただいている様子が読み取れる。

【9月】講義の野菜の話は非常に興味を持って聞くことができました。体操はいつも終わった後気持ちがすっきりします。楽しく過ごすことができました。

【10月】素敵な先生たちで楽しい教室でした。大学にも好印象が持てました。次回以降も楽しみに来たいと思います。

【12月】今日も電車を二つ乗って1時間かけて来させていただきました。どんなに疲れていても来てよかったです。食品の話も役に立ち、分かりやすく、眞琴先生のお声、お顔を見てまた元気になれます。

【2月】広い体育館で思う存分動けて、とても楽しい時間を過ごしました。素敵な指導の先生、気持ち良い音楽を聞きながら動くのは体にもいいし、健康を保つ一番の方法だと思います。また、このような機会があるといいと願っています。

12月3日の活動の様子

血圧、体重などの計測

ボールを使ったエクササイズ

1月21日の活動の様子

ミニ講義の様子

チェアエクササイズの様子

2月4日の活動の様子

ストレッチ

体力測定

4. シニア健康教室の体力向上への寄与について

シニア健康教室では、教室の最初と最後に新体力テスト（65歳～79歳対象）を行っている。体力テストの内容は以下の通りである。

①握力
②上体起こし
③長座体前屈
④開眼片足立ち
⑤10m 障害物歩行
⑥6分間歩行

実施に当たっては、ADL（日常生活活動テスト）を事前に実施し、ADLによるテスト項目実施のスクリーニングに関する判定基準にしたがい、テストのその実施の可否を検討した。

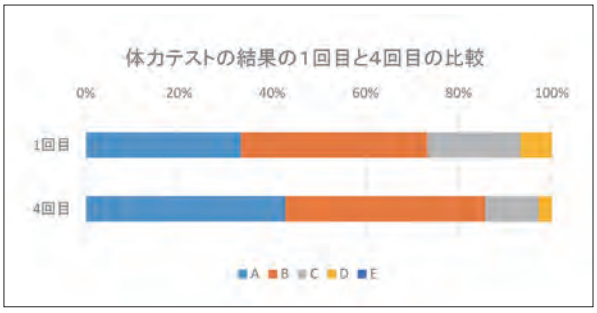
グラフ中のA～Eは、文部科学省「新体力テスト実施要項」の「テストの評価表」による総合評価基準表の段階を表している。各年齢段階ごとに総合得点の高いものをAとするように段階が示されている。

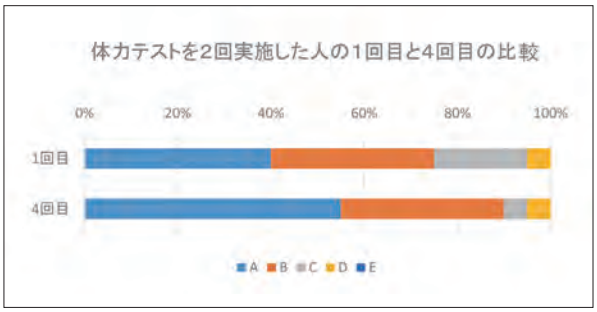
平成27年度は、1回目（11月）と4回目（2月）に新体力テストを行った。総合評価の段階の割合を見ても、全体でもプラスの変化があり、特に2回とも体力テストを受けた人を抽出して比較をしてみても、総合評価A・Bが増えており、「シニア健康教室」の成果としてとらえていた。

平成28年度は、1回目（7月）と8回目（2月）に新体力テストを行った。総合評価の段階の割合はA段階が減少し、C段階が増加する傾向にある。2回とも体力テストを受けた人（22名）を抽出して比較をしてみても、同様の結果であり、平成27年度とは逆の結果となっている。

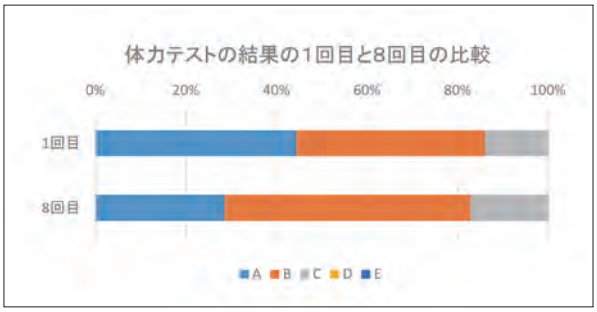
この原因を分析するため、平成28年度、それぞれ2回とも体力テストを受けた人を抽出し、体力テストと年齢、出席回数の関係を分析してみた。それぞれの相関係数は、体力

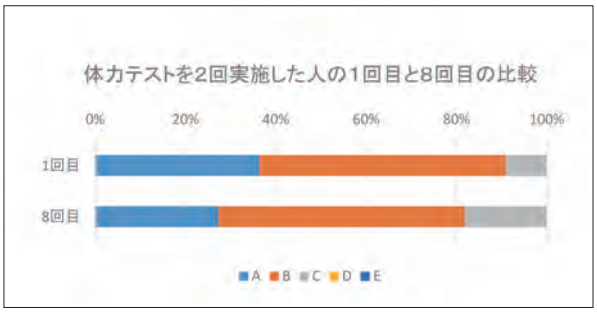
＜平成27年度＞

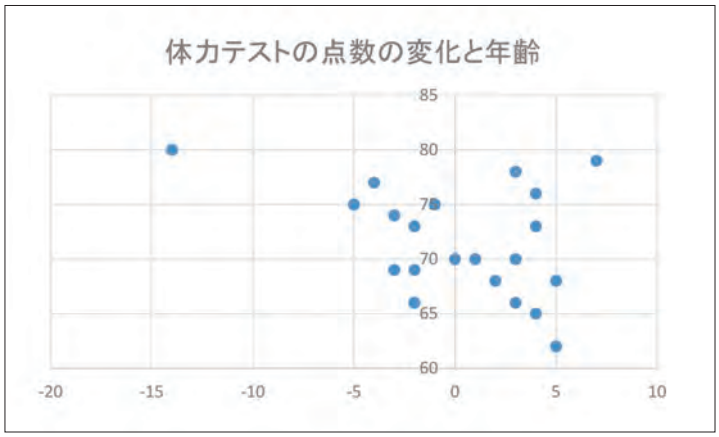




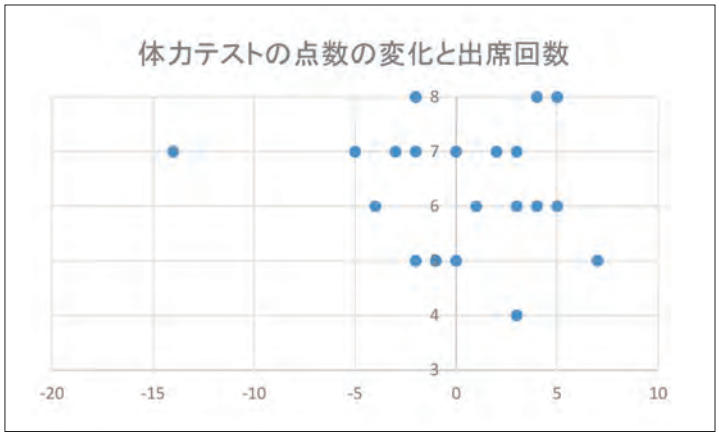
＜平成28年度＞







テストと年齢が-0.36、出席回数が-0.18となった。体力テストと年齢には弱い逆相関がみられた。この結果から推測すると、シニア層の場合、期間が長期になると、その間に生じる加齢による体力の後退は、体力を維持するための努力を上回り、結果として体力の低下をきたしているとも考えられる。



「体力テストの点数の変化と年齢」のグラフは、体力テストの点数を横軸に、年齢を縦軸にとり、22名の参加者の位置を示したものである。

「体力テストの点数の変化と出席回数」のグラフは、体力テストの点数を横軸に、出席回数を縦軸にとり、22名の参加者の位置を示したものである。

これを見ても、「体力テストの点数の変化と年齢」には、逆の相関が読み取れる。

今後、標本数を確保し、継続して傾向を分析していく。

体力テストに合わせて実施しているADL（日常生活活動テスト）の結果についても検討を行った。

平成27年度は、「休まないでどれだけ歩けますか」という項目以外は、すべて改善の傾向にあった。

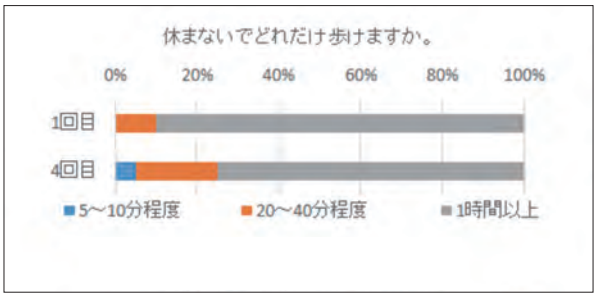
平成28年度は、「どのくらいの重さの荷物なら、10m運べますか」「仰向けに寝た姿勢から手を使わないで上体だけを起こすことができますか」という項目で、「できなくなっている」と感じている参加者が多かった。

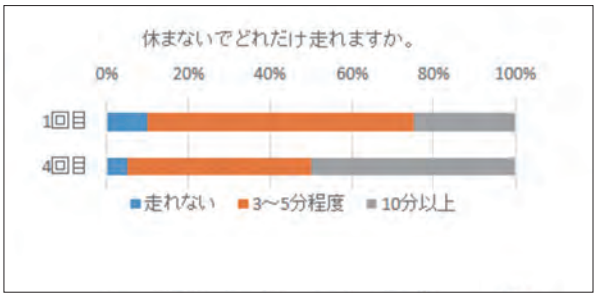
これらの現象がどのようにつながっているのかは、今後さらに検討を続けていく必要がある。昨年度の平均年齢が68.1歳、今年度が69.2歳であること、昨年度のシニア健康教室の実施回数は4回、今年度は8回と条件の違いもあり、一概に傾向を読み取ることは危険であるが、以下の点は今後の活動に生かしていきたいと考えている。

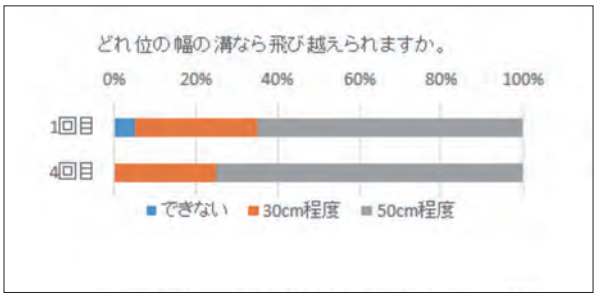
・参加者は、教室を実施している期間でも、確実に年齢を重ねている。体力低下が起きている可能性があることを前提とし、シニア健康教室のプログラムを組み、運営をしていく。

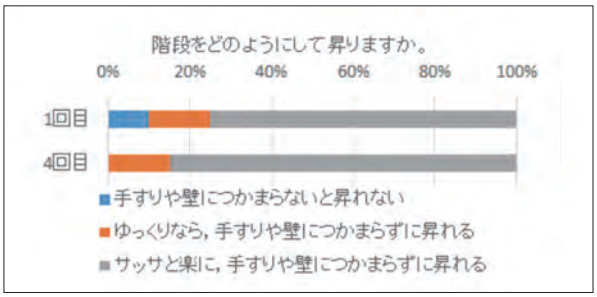
・参加者にも体力テストは、体力の状態を知る1つの目安であることを確認し、当日の体調もあるため、結果に一喜一憂しないことを徹底する。

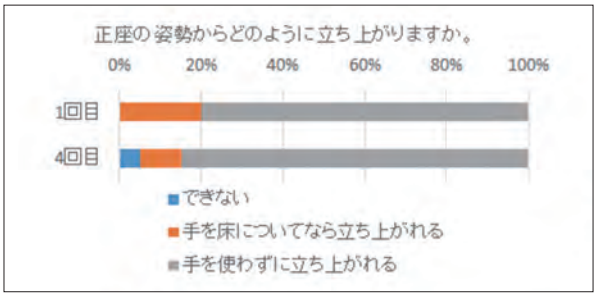
平成27年度のADLの結果

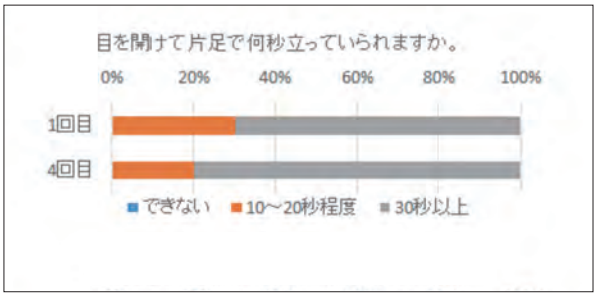


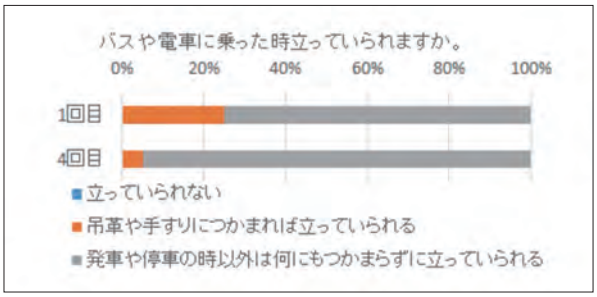


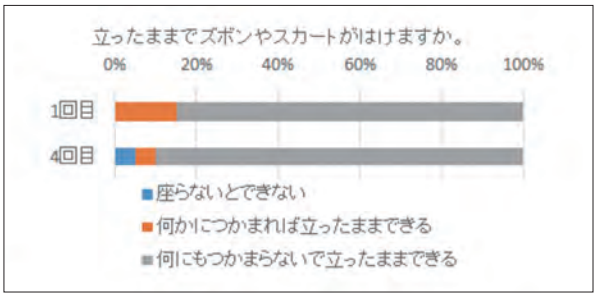


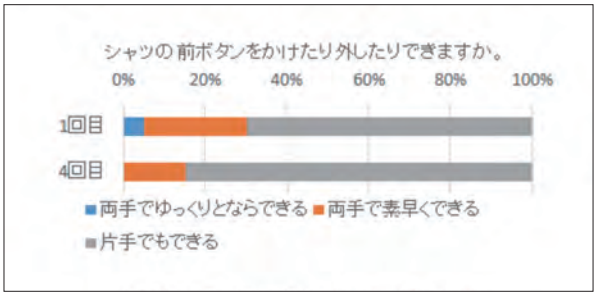


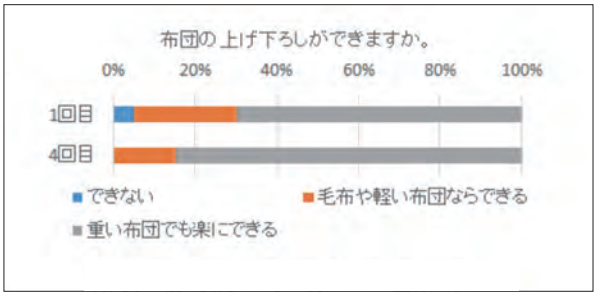


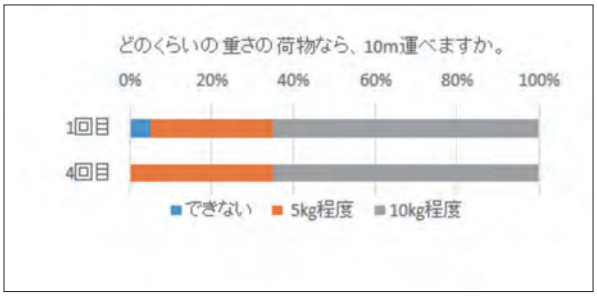


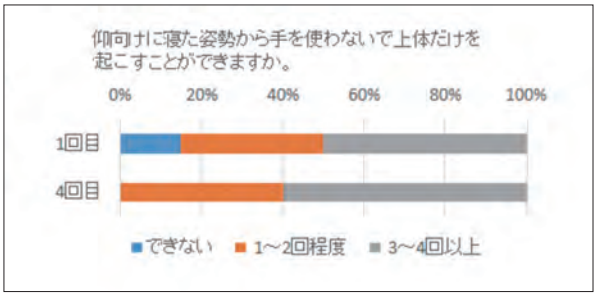




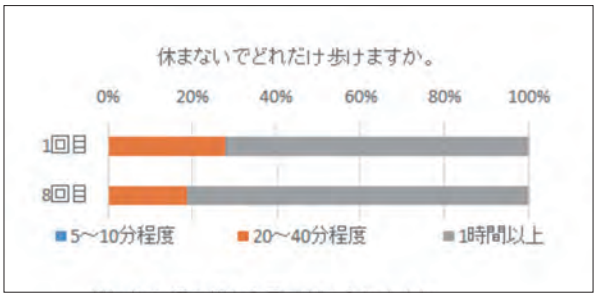


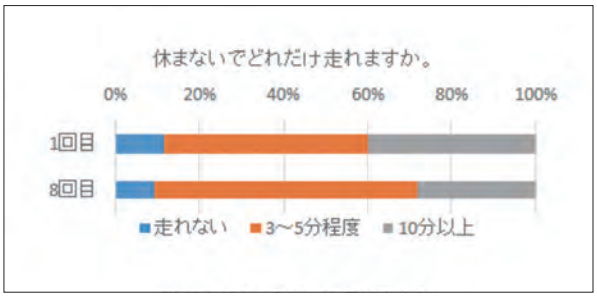


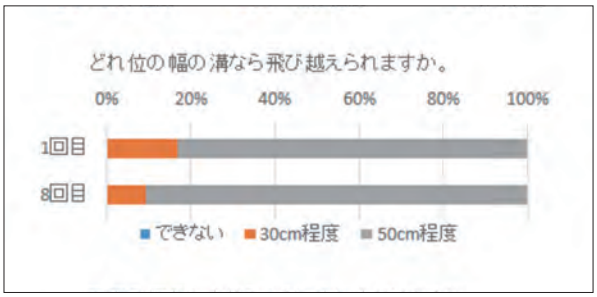


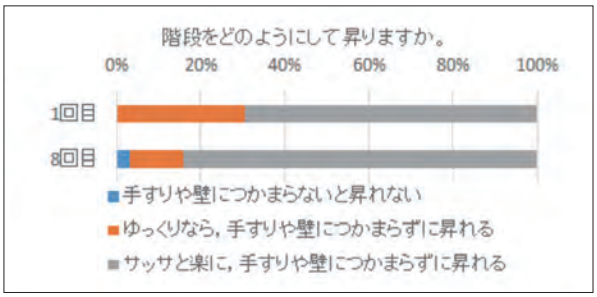


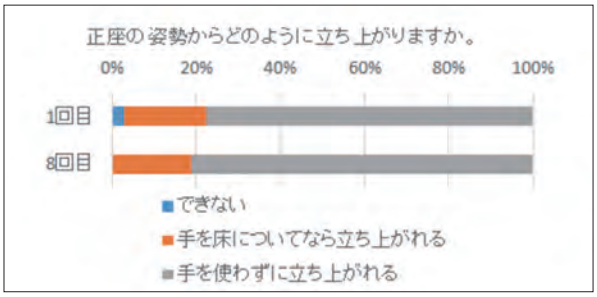
平成28年度のADLの結果

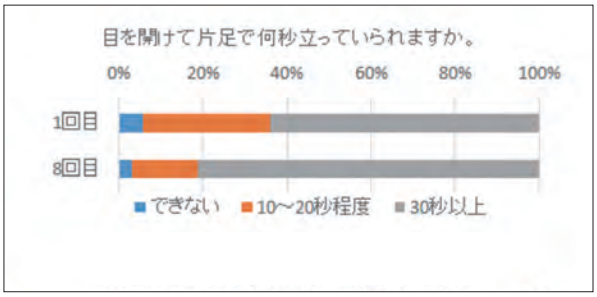


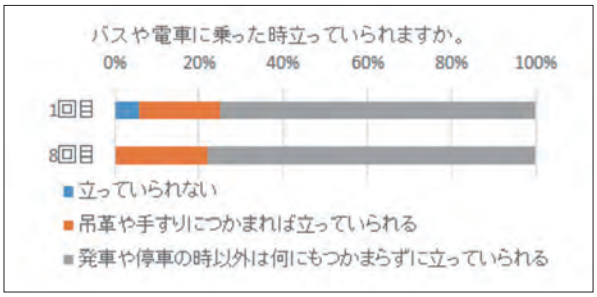


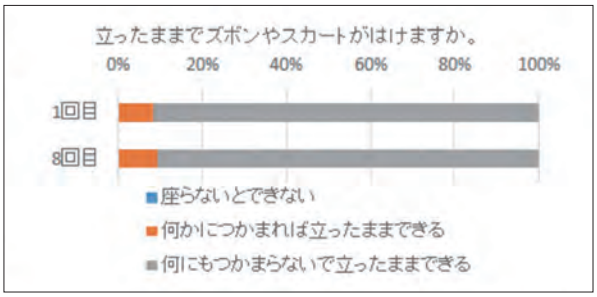


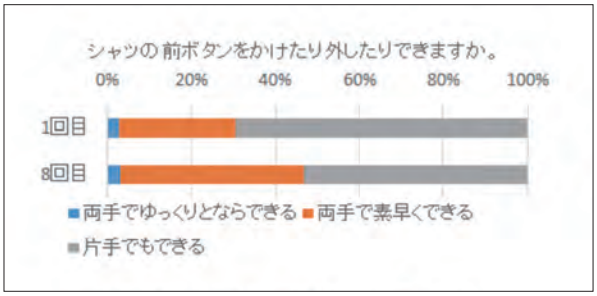


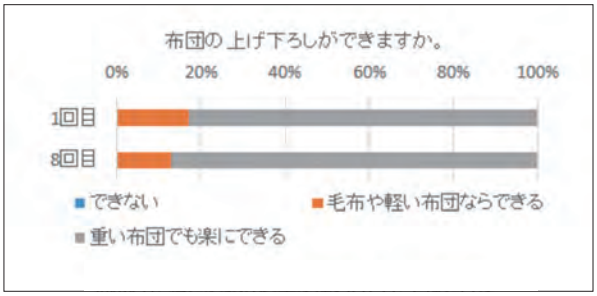


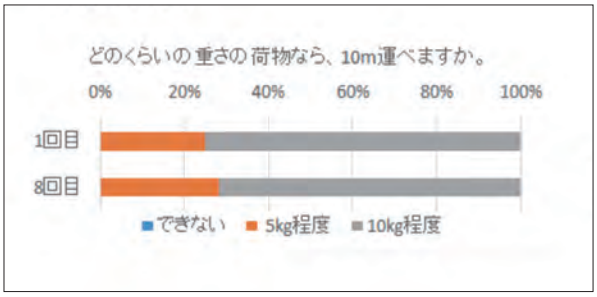


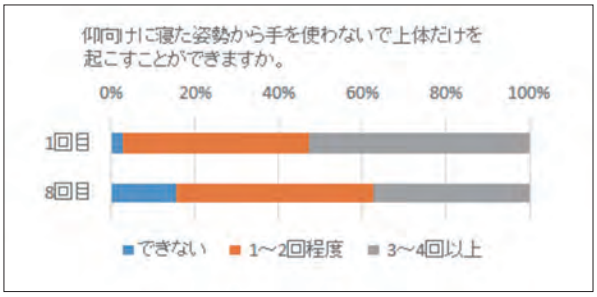












5. 事後の対応について

シニア健康教室では、毎回、体脂肪率や血圧等を測定している。その結果を毎回下のようなグラフにしてお渡ししてきた。運動による変化を実感してもらいたかったからである。

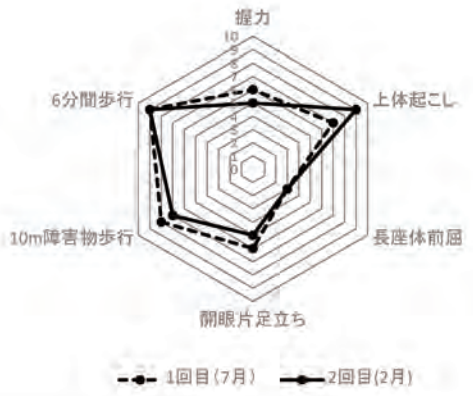
体力テストの結果は、次ページのようにまとめ、参加者に送付した。日常的に取り組める運動例も合わせて送付し、テスト項目が低かった部分をどのように補っていけるかのアドバイスを行い、日常生活での運動の継続を呼びかけた。

十文字学園女子大学　健康栄養学科　「シニア健康教室」計測の結果

シニア健康教室　体力テストの結果　　十文字学園女子大学　健康栄養学科

様

	記録						得点						得点合計	総合評価
	握力(kg)	上体起こし(回)	長座体前屈(cm)	開眼片足立ち(秒)	10m障害物歩行(秒)	6分間歩行(m)	握力	上体起こし	長座体前屈	開眼片足立ち	10m障害物歩行	6分間歩行		
1回目(7月)	22	12	28	24	6	675	6	7	3	6	8	9	39	B
2回目(2月)	21	16	28	12	7	660	5	9	3	5	7	9	38	C



6. まとめ

ミニ講義と運動を組み合わせたシニア健康教室のプログラムは、好評である。ミニ講義では、栄養や運動に関する大学の最先端の専門性の高い内容が分かりやすく学べ、参考になるとの評価が高い。運動面では、指導された先生方の指導力の高さを評価される方が多く、参加者の高い満足度につながっている。学生スタッフへの感謝を感想にあげる参加者も多い。大学の社会貢献活動としてばかりでなく、学生の学びの場にもなっている。

来年度以降、今回の活動の成果・課題をもとに、より安全で、効果的なプログラムの開発を行っていく。特に、運動の日常化、地域への浸透を図れる内容を検討していく。

「新座・地域ケアのつどい」の取り組みについて（第2報）

About the action of "the gathering of the Niiza community care"（the 2nd report）

太田眞智子[1)]　Machiko OTA
野島　靖子[1)]　Yasuko NOJIMA
山口　由美[1)]　Yumi YAMAGUCHI
富井　友子[1)]　Tomoko TOMII

1）十文字学園女子大学・人間福祉学科

キーワード：　地域　福祉　事業所　学び　繋がり

要旨：平成28年度　地域連携共同研究所の「新座市内　介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み」として行っている「新座・地域ケアのつどい」は新座地域の介護・看護・福祉職らでつくる学びの集まりである。28年度は「くすりの基本と薬剤師の役割」「認知症ケア講座」の研修会。また映画「あん」自主上映会を開催し、さらに小冊子を作成した。

今回の実践報告においては映画「あん」上映会のアンケートを質的に分析し、映画「あん」を上映し、参加された方々が得た思いや考えについての分析を試みた。上映会に参加された多くの方々が映画を通じて、障害やハンセン病への理解の必要性、正しい知識を伝えていくことの大切さ、生きる意味、共に生きる意味について学ぶ機会となったと考える。さらに「大学だからこそ観に行こうと喜んでいる人たちがいる」「またの機会を楽しみにしています」との声をいただき、地域連携の重要性、大学の役割について再認識する機会となった。

「新座・地域ケアのつどい」は学びの場であり、情報を共有でき、参加する方々の自己研鑽の場になっていると考える。

Ⅰ　はじめに

平成27年度から地域連携共同研究所の「新座市内　介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み」として行っている「新座・地域ケアのつどい」は新座地域の介護・看護・福祉職らでつくる学びの集まりである。

「新座・地域ケアのつどい」の第1回目は2006年12月15日金曜日6:30から、9201教室で開催された。集まって下さった方々は地域の事業所の方が11名、教員5名と学生3名の19名であった。「横のつながりを作りたい」「こんな会が出来るのを待っていました」「楽しくて面白い会にしていきたい」「世界を拡げ利用者に反映していきたい」「情報がほしい」「仕事の悩みについて語り合える場としていきたい」等々の声が寄せられた。その日から11年が経過した。研修会や交流会、介護フェスティバル、文化交流等々の取り組みを行ってきた。近年は2ヵ月～3ヵ月に一回集まり、研修会を通じて、学びや交流に力を入れ、市民とともに新座の福祉・医療を育てる活動を行ってきた。大学としても市民とのネットワーク、日々奮闘し福祉実践を行う事業所の方々との学びの場は貴重であると考える。

十文字学園女子大学教員4名と共に、下記の非常勤講師2名、新座市の福祉事業所の方々が世話人（プロジェクトメンバー）となり、企画運営を行っている。

非常勤講師	新井幸恵・中村幸子
ＮＰＯ法人暮らしネット・えん	加藤真弓・岡田博美・小島美里
（株）かくの木	藤橋妙子・中澤俊介
ＮＰＯ法人太陽	石川千枝
社会福祉法人隆信会	萩元真由美

平成28年度は平成27年度と同様、地域連携共同研究所から補助を受け、2度の研修会及び映画自主上映会を行った。また小冊子を作成し活動について振り返る機会をいただいた。研修会や映画鑑賞会のテーマについては、プロジェクトメンバー及び参加者からの希望のテーマを中心とした。

Ⅱ　活動報告

今年度は、「第51回新座・地域ケアのつどい」として研修会、「第52回新座・地域ケアの集い」として映画自主上映会、さらに「第53回新座・地域ケアの集い」として「認知症講座」を開催した。また冊子「埼玉県・新座市　新座・地域ケアの集い2号　2011年～ 2017年」を作成した。

1.「第51回新座・地域ケアのつどい」研修会

日時：2016年6月24日（金）18時半～

テーマ：「くすりの基本と薬剤師の役割」　　参加者：28名

（1）目的

薬の基本について、また在宅生活に欠かせない薬剤師の役割について研修を行う。

（2）内容

パワーポイントなどを活用してわかりやすくお話いただいた。人数がそれほど多くなかったこともあり、一通りお話いただいた後、フロアから薬についての質問なども出され、講師の先生とフロアの方たちと双方向の講座になった。在宅での薬剤師の役割としては、残薬問題について事例を使って丁寧にお話いただいた。また、かかりつけ薬剤師の話もあり、現場では薬と結びつけた体調チェックなどを行っていることがわかった。

（3）アンケートと結果について

講座後のアンケートはおおむね「わかりやすかった」という声が多く、残薬の話などは関心が高かったことがうかがえた。薬剤師の役割について、これまで福祉専門職の方が十分に理解できていなかった面があったようだが、今回の講座を通して、役割の理解も深まったことがうかがえた。また、今後新座地域においては在宅福祉のチームの一員として薬剤師と協働することも増えるのではないかと考える。

2.第52回新座・地域ケアのつどい－映画「あん」自主上映会～「障がい者差別解消法」の理解を深めよう～についての報告

上映日時：2016年11月6日（日）13:30 ～　　参加者数：107名（スタッフを含む）

（1）準備について

「新座・地域ケアの集い」世話人（「新座市内　介護・福祉・医療の資質向上と連携強化への取り組み」共同研究者）と共に10時半より準備を行った。

（2）当日の内容について

1）2016年4月に「障害者差別解消法」が施行されたことから「障害者差別解消法の理解を深めよう」を副題とした。2016年施行の法律「障害者差別解消法」の概要･目的･法律が示す「不当な差別的取扱い」と「合理的配慮」について等、簡単な説明を行った。さらに2016年7月に起こった津久井やまゆり園のたくさんの障害のある方が殺害された事件に触れ「差別とは何か」について今後も考え続けていただきたいという旨のメッセージを伝えた。

2）映画「あん」の上映。監督、河瀬直美。樹木希林・永瀬正敏が主演を務める映画である。「縁あってどら焼き屋『どら春』の雇われ店長として単調な日々をこなしていた千太郎（永瀬正敏）。そのお店の常連客である中学生のワカナ（内田伽羅）。ある日、「どら春」の求人募集の張り紙をみて、そこで働くことを懇願する老女・徳江（樹木希林）が現れ、どら焼きの粒あんつくりを任せることに。徳江の作った粒あんはあまりにも美味しく、みるみるうちに店は繁盛。しかし心無い噂が、彼らの運命を大きく変えていく。」（チラシより）元ハンセン病患者の徳江の生き様から、生きるとは何かを問い、差別について考えさせる映画である。

3）アンケートを実施した。アンケート内容について

アンケート内容

①「差別解消法の理解を深めよう」についての理解

②映画鑑賞の動機

③映画の内容について期待通りかという問いと感想

④「新座・地域ケアの集い」で受講したい研修内容

アンケートの内容については次の項にまとめることとする。

映画「あん」自主上映会の様子

3. 第53回新座・地域ケアのつどい－認知症ケア講座

日時：2017年2月12日（日）13:00 ～

参加者数：101名（一般：45名　事業所関係：47名　学生：2名　教員7名）

（1）目的

2014年に「認知症ケア講座」を開催した。反響が多く2回目の開催となった。認知症の症状には、記憶障害や見当識障害など認知症の方なら誰でもが現れる「中核症状」と、徘徊や妄想・幻覚など環境や心理状態によって一人ひとり異なる「周辺症状（BPSD）」がある。今回は、「周辺症状」（行動・心理症状）に対応するケアについて実践的なお話を通して学ぶ。

（2）内容

認知症のBPSD（周辺症状）を回避するケア～ケアの力で症状が改善する可能性を知ろう～というテーマで講座が行われた。まず認知症高齢者との関係性およびその影響について理解すること。BPSD（周辺症状）の前にみられるメッセージに気づくことの重要性。さらに「服従」「謝罪」「転嫁」「遮断」「憤怒」といった“不同意メッセージ”を意識すること、そして変えること。また“認知症の終末期のケア”についてその基本をお話してくださり、現実にある具体的な事例からわかりやすくお話をいただいた。認知症の方のケアを行う時、“あなたは大切な存在である”という思いを、目を合わせ意識して伝えていくこと、体現される「ことば」の大切さを語って下さった。

講座は終始伊東先生のユーモアあふれるお話であり、笑いあり、参加者からのうなずきなどのリアクションありで、活気のある講座となった。

（3）アンケートについて

アンケートについては82名の方にご回答いただいた。来場いただいた年齢は50歳以上の方が多く、ご家庭で認知症の方を介護している人や、介護の専門職など様々だった。感想として「よく理解できた」「期待以上の内容だった」「役立った」という声が多数であった。更に「目を見てお話しすること」「相手の立場になってかかわっていきたい」「認知症だけではなく、『人と関わるとき』に大切なことを学んだ」と書いてくださった方もいた。

認知症ケア講座の様子

4. 小冊子「埼玉県・新座市　新座・地域ケアの集い2号　2011年～2017年」の作成

（1）小冊子作成の目的

①2006年から53回の集まりを開催した。2011年3月10日に発行された第1号に引き続き、第2号を発行し資料の整理を行う。

②ますます「介護」の現状が厳しい時代にあり、新座・地域ケアの集いに参加されている人々の思い、参加されている人たちの声を集める機会とする。

③新座・地域ケアの集いの果たした役割とは何なのか、今後果たすべき役割とは何なのかについて検証する。

（2）冊子の内容―ページ数と構成

ページ数は76ページである。2部構成とし、第1部は「取り組みのまとめ　第27回（2011・7・15）～第53回（2017・2・12）」1回1回のチラシと内容についてまとめた。第2部は「新座・地域ケアのつどいに参加して」をテーマとし、世話人の皆さま（10名）から、日頃考えていること、地域ケアの集いに望むこと、特に印象的な企画、つどいに対する思い等々の文章を寄せていただいた。

（3）表紙及びカット

表紙およびカットは新座市で生きてこられた故「岩本澄考氏」の版画集「続・四季彩々」から、ご子息の了承を得、使わせていただいた。ご子息の岩本氏には日頃から新座・地域ケアの活動に参加いただいており、“「岩本澄孝」を語る”という紹介文を書いていただくことができた。

（4）小冊子作成の成果

新座・地域ケアのつどいの初回から数えると11年が経過した。参加して下さった方々の名簿を見ると、事業所や団体は新座市の事業所を中心に志木市・和光市・ふじみ野市からざっと75団体以上。名簿に記載して下さった人数は270人。介護フェスティバルやイベントや映画上映会等々の一般参加者を含めると1度は顔を出してくださった方は300人以上であり、53回の延べ人数は2000人以上に及ぶ。

冊子「新座・地域ケアのつどい」第2号は2011年7月15日第27回テーマ「改正介護福祉士法にみる『医行為』に規定、及び現場で懸念されること」から始まっている。介護保険について、障害者福祉について、被災地の方からのメッセージ、社会保障制度改革、腰痛予防、看取りについて、介護予防・日常生活総合事業について、認知症ケア講座等々、内容は多岐に渡っている。小冊子作成は「新座・地域ケアのつどい」の活動を振り返る貴重な機会となった。

ＣＯＣ事業とは地域で活躍する人材の育成や大学を核とした地域産業の活性化、地方への人口集積等の観点から、「地域のための大学」として、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成に取り組む事業のことであり、「新座・地域ケアのつどい」はまさに地（知）の拠点としての取り組み、実践であるという思いを新たにした。

小冊子作成の報告もかねて、4月に参加して下さる皆様と懇親会を開催した。皆様から「新座・地域ケアのつどい」に対する感想を伺った。「刺激を受ける場」「地域を意識し自分を見つめ直す場」「学ぶことで希望が見えてくる」「知恵を持ち寄ること」「自発的な学びの場は大切」「こういう会

があるってなんていいんだろうと思ってきた」等々の声を聴くことができた。顔に見える関係を大切にしてみんなで作っていく場にしていこう、と話し合った。

小冊子の表紙には岩本氏の「続・四季彩々」から「福寿草」の絵をいただいた。「福寿草」には「幸せを招く」そして「思い出」「回想」という花言葉がある。この冊子はまさに明日に繋がる「回想」の書であると考える。

Ⅲ 「52回新座・地域ケアのつどい－映画「あん」自主上映会」 アンケート報告

1. 研究目的

上記Ⅱの活動報告で記載したように、映画「あん」の上映会を開催し、アンケートを実施した。アンケートの内容には参加して下さった方々の思い、声がたくさん記載されていた。アンケートの内容をまとめ、映画「あん」自主上映会を実施して得た思いや考えについて考察していくこととする。

2. 研究方法

（1）調査の手続き

映画「あん」上映会においてアンケートを実施した。

（2）調査対象　参加者の中からアンケートにご協力いただいた下記の方々とする。

＜年齢＞　10歳～20歳　3人　　20歳～30歳　3人　　30歳～40歳　　6人
40歳～50歳　9人　　50歳～60歳　22人　　60歳以上　　44人
計87名

（3）データの収集方法

映画「あん」上映会に参加して下さった方々にアンケート用紙を配布し、87名分を回収した。

（4）分析方向

87名のアンケート中で、「あん」の内容及び全体についての感想を自由記述していただいた。その感想から具体的内容の記述のある文章を中心に、研究の目的に添う内容の文章を丁寧に読み取った。それらの内容を概念化し、類似性や相違性の点から分析し、概念の意味内容に基づいて抽象度の高いカテゴリーへと統合した。

（5）倫理的配慮

映画「あん」鑑賞会に参加して下さった方々に口頭で目的を説明し、調査結果についてはデータ提出者が特定されないように配慮を行い、目的以外には使用しないことを伝えた。

3. 研究結果

43の概念及び9のカテゴリーに分類することができた。

（1）願い

願い	ごちゃまぜの世界に	・「垣根」は人の心が勝手につくるもの。新座から是非垣根のないごちゃまぜの社会を根付かせていただきたい
	考える機会を	・考える機会が増えることを望む。皆それぞれ意味があって生まれてきた。
	差別のない社会に	・差別のない社会が当たり前になってほしい ・やさしい人たちが苦しまない社会になっていくことを願ってます ・差別のない社会が当たり前になってほしいと切に思いました

（2）自己を振り返る

自己を振り返る	自分のできること	・自分のできることから行って行きたい ・自分の出来ることからやって毎日が暮らせたらと思いました。
	考えるべきこと	・今でも偏見にさらされている、世の中に受け入れられないことがたくさんあると思うと心が痛む。私たちが考えるべきことがたくさんある。
	気づき	・頭の中で分かっていても気持ちがついて行かない、自分の弱さに気づきます。
	私の中の何か	・自分が生きようと思っても、世間から与えられたレッテル、拭いようのない差別、私の中にある何者か、いろいろ考えさせられる映画だった。
	理解できる人になりたい	・障害のある人の生き方のむずかしさを感じた。理解していける人になりたい。
	自己の体験から	・ハンセン病の方と接したことがあったので、とても心に響きました。 ・誰もが障害をもって年齢を重ねていくことを母の死をもって体験しました。

（3）感動

感動	感動	・感動を新たにしました ・久しぶりにいい映画を観た。
	いい映画だった	・いい映画でした。（多数）
	本質を突く	・人間の本質を突く映画だった。
	やさしさ	・やさしい心が通っている良い映画だった。
	いいメッセージ	・ありがとう、いい映画でした（多数） ・素晴らしい映画をありがとうございました
	感謝	・内容は知っていたのですが改めて感動を新たにしました。 ・今回2度目の鑑賞。感動を新たにしました。病気病後であってもこんな素晴らしい仕事ができるなんて。 ・思っていた以上に感動しました。 ・すごく良かった（5） ・とても良いメッセージをいただきました 。

（4）存在有意感

存在有意感	生きる意味	・映画の中の「あらゆるものに耳を澄ましてみる」という言葉にとても感銘を受けた。きっと悲しいことがあるたびに、そういう思いが湧き、それが生きる意味に繋がっているのだと思う。
	人間の尊厳	・「生きていく」意味を考えさせられた。 ・生きていることに意味がある、皆誰も平等 ・人間の尊厳とは何か考えさせられた。「何かになれなくても、私たちには生きる意味があるのよ」という徳江さんの言葉が心に残った。
	生きることは素敵なこと	・じわじわと感動が押し寄せてきた。生きることは素敵なこと。
	ありのまま生きる	・改めて「生きること」の言葉が印象的。自らとわたしのまわりの方々への存在を考えてしまいます。 ・生きていくという意味を感じさせてくれる映画でした。暗くはなく本当にいい映画でした ・桜がきれい、自然がきれいでありのままに生きるということに繋がるのかなと思った ・年をとっても働くことのできる幸せを実感する。

（5）共生（インクルージョン）

共生（インクルージョン）	心の中の分け隔てをなくす	・心の中の分け隔てをなくすことは本当に大切だと感じた。
	心の中の壁を払う	・私たち人ひとりの心の壁を取り払うことが大事である。 ・世間の目から徳江さんを守れなかったの店長の言葉が胸に刺さった ・行列の出来る店かららい病患者がつくる「あん」といううわさから誰も来なくなってしまう。施設に閉じ込められた状態から外に出て「本当に楽しかった」徳江さん。差別の中で生きてきた人の悲しみが良く描かれていた。

（6）理解する・学ぶ

理解する・学ぶ	正しい知識	・正しい知識（特に病気に関して）を得ること、そのためには情報を拡げる機会、環境が必要であることを実感した。
	ハンディのあるかた方から学ぶ	・苦しい時代が長くつづいたんだな
	差別解消法を知った	・こんなにながい間、隔離されて生活している人たちがいる。もっとたくさんの人たちに知ってほしい。
	心を平らにして	・映画を観る機会と「障害者差別解消法」を知る機会となった。
	現実への理解	・ちょっと難しかったけど勉強になりました。
	人権教育の必要性	・ハンディのある方に教えてもらうことがよくあることを考えさせてくれた。
	知る機会になった	・心を平らにして理解することが大切。 ・カナリアをかごから出してあげたこと、どら焼きが売れなくなってしまったこと、考えさせられた。 ・ハンセン病の現実についてよく知らなかったが少し理解出来た。辛く苦しい闘病生活があり差別とも戦ってきたのだと思う。心にしみた。 ・小学校のカリキュラムに入れて、偏見が育たないうちに人権教育が必要だと思う。 ・なかなか人の心が変われず、差別がなくならないことを悲しく思います。 ・このような映画なり本なりがたくさん出ることを望んでいます。 ・差別について考えさせられた。 ・障がいについて改めて身に染みて感じました。 ・障害についての理解と実態について映像を通してよくわかりとても心に残る映画でした

（7）伝える・つながる

伝える・ つながる	周りに思いを伝えること	・ハンセン病について、患者さんが立ち上がっているのを新聞で見た。それまで知らなかった。どんどん外に出ることで知らない人に伝えていくこと。
	知ってほしい	・今もなお、障害があることで辛い思いをしている方がいると思うとつらく悲しい。一人ひとりがこの思いを伝えていけるといい。
	考える機会を拡げたい	・全生園に一度は伺いたい。
	老人力とは福の神となる	・もっともっと多くの人に見てもらいたい。法と現実の乖離を感じる。
	差別をなくしたい	・字幕付きが良かった。
	環境を整えること	・一人ひとりがこの想いを伝えていけるといいです。 ・同じ日本の中でこんなに長い間隔離されて過ごしている、生活をしている人がいる、もっといろんな人に知ってもらいたい ・日常生活の中で考えることがないのですが、この映画を通じて改めて知り、考えていかなければならないと思いました ・障害者の目線を意識するようになったが身近に感じていない方にも、考える機会がもっと広がればと願ってやみません。みなそれぞれ意味あって存在し、生まれてきたのだから。 ・老人力というのは福の神となるのだな、と思った。年齢・障害・病気等に関係なく、その人の持っている能力は生かせる環境が整えば幸福の輪を広げることができる、そう感じた。 ・差別ってなくならないですね。

（8）映画への賞賛

映画への称賛	風の効果	・淡々と進行され、風の効果が良かったと思います。
	美しい	・役者が良かったです
	心に残る	・樹木さんの徳江さん役が上手かった
	美しい	・映画が美しかった（多数）
	俳優さんてすごい	・地味でしたが心に残る作品でした ・俳優さんてすごいですね ・高齢の方の言い回しや表現も上手にできていて、母と重なった。 ・とてもきれいな映画でした。生き方、やさしさ、色々と考えさせられた ・全体にやさしい心が通っていて良い映画でした。

（9）大学の役割

大学の役割	安心	・大学だからこそ、安心して観に行こうと喜んでいる人たちがいるのでは。映画館には足を運べない人たちのためにまたこのような企画に載せて考える場面を与えていただきたい。
	たくさんの人と見る機会	・またの企画楽しみにしています。 ・大学でたくさんの学生や教職員が見る機会があるといい。 ・このような映画を観る機会がなく、また「障害者差別解消法」を知る機会もなかった。 ・またの企画が楽しみです。いい映画があれば是非お願いします。 ・あまり見られない映画を大勢の方と見る機会があるとうれしいです。
	研修の必要性	・高齢者、認知症の方、障害者を理解するための機会研修を望む。 ・大きなスクリーンで見れてよかった。
	テーマにあっている	・映画もよかったのですが、今回のテーマによく合っていていろいろ考えさせられました
	考えるきっかけになる	・いろいろなことを考えるきっかけになると思います
	車いすの方の参加	・2人の車いすの方の参加が良かった。

4.考察

参加者のアンケートからは「あん」という映画を観た感動が伝わってくる。映画鑑賞会のテーマの副題を「『障がい者差別解消法』の理解を深めよう」とし、「障がい者差別解消法」についての説明を行ったことからか、差別について考える内容の感想もみられた。自主映画上映会開催の意味について様々なことが伺えた。

第1にカテゴリー1を「願い」とした。「障がい者差別解消法」の説明や、ハンセン病のために差別され生きてきた主人公「徳江さん」の生き様から差別のない社会になってほしい、新座から垣根のない社会へ、と願う姿が伝わってきた。

第2に「自己を振り返る」である。映画上映会を通して自分には何が出来るだろうか、と自問する姿が浮かんできた。難しいけれど理解していける人になりたい、体験から障がいについて考える、自分の中の差別に対する複雑な思い等々について記載があり、自己のあり方を振り返り考える機会となったと考える。秋山[i)]は人間には「他人の痛みを自分のものとして感ずる『他者への痛覚』がある」（秋山:374）と述べている。また土屋[ii)]は「ささえる」ことの原則として死に至る病、病気等の「当事者性の序列」について考えていくと「本人が最も当事者であり身近な人ほど当事者性が高く、身近でない人ほど低い」という「序列づけ」が成立するといった内容を述べている。角度を変えてみるとアンケートから見えてくる「自己を振り返る」は、知ることなくしては理解することができないし、映画を通して身に置き換えて考えるといった「当事者性」を感じることが

できる。それは本書の「ささえあう」というテーマに合致する。参加された方たちの多くが自己の問題として捉え、自己を振り返り、さらに「ささえあう」ことの大切さを感じ取ったと理解した。

第3に「感動」である。アンケートの多くに「いい映画でした」「感動した」「すごく良かった」という記載があった。「ありがとう」という感謝の言葉も数多くあった。上映会を通して感動する良いメッセージが伝えられたと考える。自らが元患者であり、ハンセン病国賠訴訟の原告として国を相手に闘い勝訴した、上野正子氏は自著「人間回復の瞬間」[iii)]を著した。その中で、訴訟に反対していた方々が、今後は一緒に闘う決意を示してくれた時に「感動はその人の心を動かし、出会いはその人の人生を動かす」と述べている。上映会はそうした感動を共有できた瞬間であったと考える。

第4に「存在有意感」である。主人公徳江さんの言葉「何かになれなくても私たちには生きる意味があるのよ」から、また風や“小豆を煮る音”から、「あらゆるものに耳を澄ましてみる」という言葉の意味を考え生きる意味を問う。秋山[iv)]は存在有意観とは「存在していることのみに価値観があるという人間観」であると書いている。それは富・名誉・地位・権力・能力・偏差値など何かを持っている（have）ではなくて、存在していること（be）ことのみに意義を見出す人間観なのであると。そうした存在有意感を、「生きる意味」「人間の尊厳」「ありのままに生きる」という言葉の中に感じ取ることができると考える。

第5に「共生（インクルージョン）」とした。インクルージョンは「包含」を意味する言葉であるが、新座市が2016年作成した冊子[v)]にもあるように「障がいのある人もない人も誰もが一緒に暮らせるまちをめざして」という意味で「共生（インクルージョン）」とした。「心の中の分け隔てをなくす」「心の中の壁を払う」ことの大切さを映画から感じ取っていただけたと考える。

第6に「理解する・学ぶ」とした。ハンセン病のことは知っていたけれど、「正しい知識を知る機会を得た」という声が寄せられた。「こんなに長い間隔離されている人がいる。もっとたくさんの人に知ってほしい」という声は、正しい知識を得たことで理解につながった、より多くの人に知ってほしい、といった願いも込められている。また「正しい知識を得ること、そのためには情報を拡げる機会、環境が必要だと実感した」という声からは学び理解する環境を作っていくことが必要であるという訴えがある。それは小さい時からの人権教育の必要性を説くことに繋がると理解した。また「心を平らにして理解することが必要」と暖かさをもって理解することをすすめる言葉があった。

第7に「伝える・繋がる」とした。第6の「理解する・学ぶ」に引き続き、理解して学び、そして伝えること、繋がること、関わる必要であると考える。「一人ひとりがこの思いを伝えていけるといい」「もっといろんな人にしてもらいたい」「その人の持っている能力は活かせる環境が整えば幸福の輪を広げることができる」といった伝えること、繋がること、かかわること、一人ひとりを大切にする環境を作ることの大切さを訴えとして感じた。

「あん」の主人公である「徳江さん」と同じ病によって1943年から国立療養所に入院を余儀なくされていた詩人の塔和子氏は「かかわり」について以下の詩を書いている。かかわること、繋がることの意味を感じ取ることができる。

胸の泉に　　塔 和子[vi)]

かかわらなければ
この愛しさを知るすべはなかった
この親しさは湧かなかった
この大らかな依存の安らいは得られなかった
この甘い思いや
さびしい思いも知らなかった
人はかかわることからさまざまな思いを知る
子は親とかかわり
親は子とかかわることによって
恋も友情も
かかわることから始まって
かかわったが故に起こる
幸や不幸を
積み重ねて大きくなり
くり返すことで磨かれ
そして人は
人の間で思いを削り思いをふくらませ
生を綴る
ああ
何億の人がいようとも
かかわらなければ路傍の人
私の胸の泉に
枯れ葉いちまいも
落としてはくれない

第8に「映画への賞賛」とした。映画の中の風の効果や全体に流れる美しさ、俳優たちの素晴らしさへの称賛の声が多数寄せられた。桜の時期に始まり、その桜の美しさの効果は底辺に流れる人間のやさしさ、命の尊さにつながると考えた。

第9は「大学の役割」である。「大学だからこそ、安心して観に行こうと喜んでいる人たちがいるのでは」「いろいろなことを考えるきっかけになる」「またの企画楽しみにしています」といった声が数多く寄せられた。大学が発信する高齢者や障がいのある人への理解を拡げる取り組み、地域の方たちと手を携えて地域を作り、学生を育てていこうとする取り組みの一つひとつが大変貴重な取り組みである。さらに地域の方が訪れ、共に学ぶことは大学にとっても財産であると考えた。

全体を通して

「あん」の自主上映会を通して「感動」を分かち合うことができた。参加された多くの方々が映画を通じて、障害やハンセン病への理解の必要性、正しい知識を伝えていくことの大切さ、生きる意味、共に生きる意味について学ぶ機会となったと考える。主人公徳江さんの言葉「何かになれなくても私たちには生きる意味があるのよ」という強烈なメッセージを受け取って下さったと感じている。さらに「大学だからこそ観に行こうと喜んでいる人たちがいる」「またの機会を楽しみにしています」との声をいただき、地域連携の重要性、大学の役割について再認識する機会となった。

この場をお借りして参加して下さった皆様、アンケートにご協力下さった皆様に心から感謝を申し上げます。

Ⅳ　取り組みの成果及びまとめ

28年度「新座・地域ケアのつどい」取り組みの成果として次のことがあげられる。

現在超高齢社会が進む中で、「その人らしく」暮らせる地域つくり、地域でのより良い人間関係つくりが求められている。研修で在宅福祉チームとして欠かせない「薬剤師の役割」について学び、理解を深めた。

映画「あん」の自主上映会では、地域の方々と感動を分かち合った。アンケートの分析結果から参加された多くの方々が映画を通じて、障害やハンセン病への理解の必要性、正しい知識を伝えていくことの大切さ、生きる意味、共に生きる意味について学ぶ機会となったと考える。さらに「大学だからこそ観に行こうと喜んでいる人たちがいる」「またの機会を楽しみにしています」との声をいただき、地域連携の重要性、大学の役割について再認識する機会となった。

「認知症ケア講座」を通して、誰もが今直面しているもしくは近い将来直面する認知症の方のＢＰＳＤ（周辺症状）や見取りについて学び、介護者および家族として振り返り、また姿勢のあり方について考える機会となった。

小冊子作成については「新座・地域ケアのつどい」について実践内容を整理し振り返る貴重な機会となった。小冊子作成後参加して下さる皆様と、顔の見える関係を大切にし、自主的な活動実践をこれからも持続していこうと決意を新たにする機会ともなったと考える。

＜引用文献＞
ⅰ）秋山智久（2001）「社会福祉実践論」ミネルヴァ書房　　Ｐ374
ⅱ）森岡正博編　土屋貴志（2006）「『ささえあい』の人間学」法蔵館　Ｐ52
ⅲ）上野正子（2009）「人間回復の瞬間(とき)」南方新社　Ｐ42
ⅳ）秋山智久（2001）「社会福祉実践論」ミネルヴァ書房　　Ｐ346　秋山は幸福に関連して社会福祉実践を行う時の視点として「存在有意観」をあげている。
ⅴ）新座市発行（2016）「障がいのある人もない人も誰もが一緒に暮らせるまちをめざして～「共に暮らすための新座市障がい者基本条例」のおはなし～
ⅵ）塔和子（2012）「希望よあなたに」ノア詩文庫　Ｐ90

＜参考文献＞
・山口由美・太田眞智子・野島靖子他（2014）「人間福祉学科『卒業生のシンポジウム』参加者の学びについて」十文字学園女子大学人間生活学部紀要第12巻397－407
・ドリアン助川（2015）「あん」ポプラ文庫
・「新座・地域ケアの集い」冊子　2011年発行
・嶋田啓一郎監修（2002）「社会福祉の思想と人間観」ミネルヴァ書房

ワークショップによる合意形成の手法の開発と
まちづくりサポートのスキーム構築に関する研究

A Study of Methodology on Community Design by Workshop between University and Citizens.

松永　修一 1)　　山田　陽子 2)　　福島　聡 3)
Shuichi MATSUNAGA　Yoko YAMADA　Satoru FUKUSHIMA

1) 十文字学園女子大学・文芸文化学科　2) 十文字学園女子大学・幼児教育学科
3) 十文字学園女子大学・地域連携共同研究所、プラスキャンパスプロデューサー

キーワード：　ワークショップ　コミュニティーデザイン　対話　イノベーション

要旨：様々な地域活動を行う上で、ワークショップの役割は増々重要になってきている。ワークショップデザインと呼ばれるワークショップの運営の仕方、問いの立て方、アイスブレイク、チームビルディング、合意形成のためのファシリテーション技術と、イノベーションを起こすためのノウハウは近年、注目されてきた。大学が提供できるワークショップやイノベーションファシリテーターとしての技術は、多くの市民活動を目指す人々にとって有効であり、学び、使えるようになってもらう事で、社会課題の解決のための様々な場面で役立つ人材育成にもなると考える。また、本研究は、地域連携共同研究所が教員同士の学際的な連携と地域との新たな関係作りのサポートを大事にしようという山田陽子研究所副所長（28年度）と研究所メンバー諸氏が共有する想いを実現するための実験の場にもなった。

1. はじめに

リンダ・グラットン（2017）では、今から訪れる人生100年時代において、今までのような、「学ぶ時期（20年）／会社勤めの時期（40年）／引退後（20年）」という３ステージでの人生を選ぶ人が減り、より多くのステージからなる人生を選ぶ人が増え、生きることが多様化「人生のマルチステージ化」を予想している。それは、「学ぶ時期」「会社勤めの時期」「引退後」以外の、
①「エクスプローラー」のステージ。旅をしたり、経験を積んだりして社会の見聞を広める。
②「インディペンデント・プロデューサー」のステージ。キャリアを外れ、自分で職を生み出す。
③「ポートフォリオ・ワーカー」のステージ。同時にいくつもの活動に関わる。といった、別のステージである。寿命100年時代には、マイホームや現金や銀行預金といった「有形資産」だけでなく、以下の目に見えない資産の「無形資産」、
「生産性資産」――これは仕事に役立つスキルや知識など。また、仕事につながる人間関係や評判といったこと。

「活力資産」――これは健康、友人、愛など。それぞれの人に肉体的・精神的な幸福感と充実感を持たせ、やる気をかきたて、前向きな気持ちにさせてくれる資産。

「変身資産」――人生の途中で、新ステージへの移行を成功させる意思と能力のこと。

についてもどう増やし、どう運用していくか、目を向ける必要があるかを述べている。まさに、自分を新たなステージ毎にバージョンアップしていくための「学び続ける力」の大切さを再認識させられる。

また、山崎亮（2017）では、人口も減少していく未来の人生100年時代に、65歳までの社会人は労働に10万時間、あとの10万時間を趣味・地域活動に活かす。「参加なくして未来なし」を提唱している。更に、定年後の10万時間も趣味・地域活動に費やし充実させることの大切さを述べている。旧来の３ステージからの生きかたの変化は、ますます地域活動の重要性を認識せざるを得ない。大学教育の中でも社会的課題、地域課題を自分ごととして捉えるための準備期間として機能させていかなくてはならないだろう。

地域と大学との連携にとって、ある種の追い風となる時代だからこそ、大学周辺の地域や縁の生まれた地域コミュニティーとの協働の機会が増えることによって、結果として学生たちは成長を促進させてくれる体験の可能性が増すのではないだろうか。そう考えると、大学教育で、協働のためのスキルの習得は大切であり、協働を前提とした「対話」も社会人になる前の学びとしても重要になってくるだろう。

ワークショップデザインと呼ばれるワークショップの運営の仕方、問いの立て方、アイスブレイク、チームビルディング、合意形成のためのファシリテーション技術と、イノベーションを起こすためのノウハウは近年注目されてきたが、大学が提供できるワークショップやイノベーションファシリテーターとしての技術の習得は、多くの市民活動を目指す人々にとって有効であり、学び、使えるようになってもらう事で、社会課題の解決のための様々な場面で役立つ人材育成にもつながるだろう。また、本研究は、地域連携共同研究所が教員同士の学際的な連携と、地域との新たな関係作りのサポート機能が必要だという、山田陽子研究所副所長（28年度）と研究所メンバー諸氏が共有する想いを実現するための実験の場にもなった。

２. 活動報告

①（４月～ 7月）：ファシリテーション講座

キャリア系授業の2年3年生向けの全学共通科目である「キャリアサポート」（松永担当）では、毎回のルーティンワークの中にワークショップの運営とファシリテーターとしての練習を毎回導入した。３回毎にグループを変え、アイスブレイクとチームビルディングの手法も体験してもらった。毎回のグループでの対話の経験は学び合いの楽しさや、自分ごとにすることの難しさの理解と、傾聴と自律的な態度の向上に役立ったという振り返りを多くの学生から見出せた。

②（８月、10月）：福島県猪苗代町はじまりの美術館[1)]と商店街の地域を結ぶプロジェクト

学生有志との２回にわたるワークショップ開催。福島県猪苗代町はじまりの美術館と商店街の地域を結ぶプロジェクト。

1）はじまりの美術館は東北震災の1年後に復興の象徴として猪苗代町に日本財団のサポートで作られたアール・ブリュット専門の美術館

学生主体によるワークショップの企画と運営は、学生たちにとっては大きな負荷になったが、この体験が地域の方々との信頼関係構築の喜びや、自分たちの自己成長の自信にもつながり、就職活動での面接時のキラーコンテンツとして機能したと感想を述べていた。

③（９月、10月）：しごと総合研究所の山田夏子氏による、グラフィックレコーディング（グラフィックファシリテーション）講座開催

キャリア系授業「社会人基礎力」での3回にわたる学部学生対象のグラフィックレコーディング（グラフィックファシリテーション）講座開催。

グラフィックレコーディングとは、会議や研修の内容、言葉では伝えきれない思いや気持ちなどを、絵や文字で表現するコミュニケーションツール。山田氏によると、グラフィック・ファシリテーションの目的は、①話をわかりやすく簡潔にする、②その場にいる人の気持ちやアイデア、関係性を活性化する――という２つがあるそうだ。とかくビジネスや組織の中では、前へ進むために極力感情に蓋をし、事実や数字など現実的なことのみ追いかける傾向がある。しかし、その場にある感情や思い、雰囲気や感覚などを見える化し、それを共有すると、その場に一体感や発想が広がる。関係性を育むには、思いや気持ちの共有はとても大事なチームのエネルギーになる。これは、システム・コーチング®の考え方にも通じる。また、見える化することで、その時に話をしている人も、話の内容にも、より鮮明に光が当たる。

会議や研修の内容を見える化することで、その場にいる人がインスパイアされるだけでなく、議論や対話が終わった後に描いた絵や文字を見ることで思いや気持ちを共有し、鮮明な記憶として定着させることができる。グラフィック・ファシリテーションは、人と人とをつなぐ大きな可能性があるコミュニケーションツールなのだ。

基礎的なグラフィックでコーディングの手法マスターのための練習を行いながら、対話の「見える化」（視覚化）による効果の体験をしてもらった。講師の山田氏は現在、NHK総合テレビ 週刊ニュース深読み（毎週土曜 朝8:15 ～ 9:28）でも活躍中の方だが、彼女のパーソナリティーの素敵さもあいまって、学生たちは楽しく学べたようだ。自分たちの身近な会議や対話の見える化にも利用してもらいたい。

＜対話を絵に起こすことのメリット＞
話の内容が見える化できる
話の内容が分かりやすく伝えられる
議論が活性化する＆大胆になれる（発言、発想が自由になる）
議論のテーマやプロセスが見える（ギャップやヌケモレも分かりやすい）
議論を共有＆共感できる（一体感、自分も議論に参加していた感が高まる）
議事録よりも読んでいて楽しい。読みたくなる。雰囲気も伝わる。
記憶を定着させやすい。

④11月：小川町古寺地区まちづくりワークショップ
　古寺地区の住民と本学学生（留学生も含む）。学生たちにとって地域住民の方々との初めての実践ワークショップ。埼玉県中山間地域支援事業「ふるさと支援隊」として委嘱されているプロジェクトで、１８名の学生が参加（うち留学生4名）。持続可能な地域づくりのために何ができるかというテーマで実施。「30年後、小川町古寺地区が日本で最も素敵な古里100選に選ばれた！」という未来を想像してもらい、その時どんな理想的な事が具体的に実現しているのかを考え、その未来が実現するために、今何をするべきなのかを考える、といったバックキャスティングという手法を用いた。住民の皆さんも、対話の楽しさの実感と共創のワクワク感を体感してもらった。

⑤2月：地域連携共同研究所第一回報告会
　研究成果発表会では、地域の方々にも広く本学の研究者の活動を知ってもらうことを目的とした。もう一点が未来志向のワークショップの開催。
　ⅰ　問いの設定：既存システムを打ち破る視野を広げたテーマ設定
　ⅱ　多様な参加者：既存の当事者だけでない多様な参加者
　ⅲ　対話の設計：方法を選択して非日常体験を演出
　ⅳ　気づきの対話：信頼関係と非日常経験を演出
　ⅴ　協調アクション：参加者全員の気づきがアクションを生み出す

⑥地域課題発見ワークセッション
　地域課題発見ワークセッション　（新座・志木・朝霞市民、教員、学生による）
ファシリテーター（福島聡）

⑦山田崇氏＋佐々木裕子氏による講演　「地域・社会課題解決、変革ためのイノベーション」
　〔山田崇〕　長野県塩尻市シティプロモーション課。年間に100回近くの講演を行う。地元商店街の空き店舗を借り、さまざまなイベントを仕掛ける「空き家プロジェクト nanoda（ナノダ）」や、ソフトバンクやJTなど民間企業のメンバーと共に地方の先進課題について行政施策立案を行う、「MICHIKARA」彼を中心とした斬新かつユニークな取り組みは、全国から多くの注目を集めている。

〔佐々木裕子〕 Change Wave 代表。東京大学法学部卒、日本銀行を経て、マッキンゼーアンドカンパニー入社。シカゴオフィス勤務の後、同社アソシエイトパートナー。８年強の間、金融、小売、通信、公的機関など数多くの企業の経営変革プロジェクトに従事。マッキンゼー退職後、企業の「変革」デザイナーとしての活動を開始。2009年チェンジウェーブを創立し、変革実現のサポートや変革リーダー育成など、個人や組織、社会変革を担う。

このお二人はMICHIKARAにおいて出会い、学生のインターンシップ、JT・Soft Bank と塩尻市との官民協働のモデルケースとして、最も注目されている。

佐々木氏は、2016年の、リクルートが主宰するIT×女性・キャリアデザインCaféでは、

> 受験勉強をして、いい大学に入って、いい企業に入ったらあとは安泰。という時代でもなくなりました。「こう生きれば正解」「こういうキャリアが勝ち組」という概念はどんどん崩れていっています。世界はどんどん変わっていくので、これをやったらあなたのキャリアはバラ色ですって、多分誰も言えない。そういう時代になってくるのだ、と教育業界の方々も痛切に感じておられていて、これからは「正解を知っている」力を育てるより「状況が変わったらそれに対応してちゃんと考えて対応できる力」を育てなければ、と教育現場の再構成をされはじめているようです。21世紀型スキルっていうのは、これからを生きる大人にも子供にも共通して必要な力になる訳です。つまり考える力ですね。想像して新しい枠組みをとっぱらって考える力。あと自分を認知する力。コミュニケーションする力。こうやって違う人と一緒に意見を戦わせながら新しいことを学んでいく力。IT・情報に対するリテラシー。そして、あなたは一体、この世の中で何の役割を果たしていく人ですか、という問いに対して自ら答えを出す力。社会の中で自分の立ち位置、存在意義を定義する力。これらを、我々も、我々の子供たちも、磨き続けていかなければならないということです。

と、述べている。ここでも、リンダ・グラットン氏の「人生のマルチステージ化」のための「学び続ける力」の必要性を再確認できる。

⑧3月：母子防災ワークショップ開催 （在学生、教員、本学総務課防災担当者、新座市職員（防災課）、防災ガールメンバーによる）

ワークショップのもう一つの柱、「防災ワークショップ」は今回が初回。本学が女子大だけに母子防災を軸に継続的に開催して行く予定。様々なステークホルダーに参加してもらいながら、身近な防災ワークショップを企画していく。

まとめ

コミュニティーデザインやソーシャルデザインと言った領域での実践成功事例からの学びは、単なる知識の伝達だけでなく、社会で求められているスキルやマインドの育成にも有効だと考える。Public mindの醸成は、本来、家庭や住んでいる地域の中で育まれるものかもしれない。

ファシリテーションに関するレクチャー及び実践は、キャリア科目「社会人基礎力」「キャリアサポート」「フィールドスタディー」で行った。毎回のグループワークでは受講者をランダムにグルーピングした四人組で進め、３回毎にグループ替えをして、チームビルディングやアイスブレイクを体験してもらい、授業開始から20分間は前回の授業の振り返りと、一週間の体験からのルーティンワークを進行役（ファシリテーター）、タイムキーパーを毎回決め、対話やワークショップ運営のスキルの練習を積んでもらっている。大学での授業でこの手法を用いることは、学生の自ら学ぶ姿勢（自律的学習者）を作り、学びつづける力を育てるのに寄与すると信じている。また、キャリア教育の分野では現在開講中の社会人入門、学科科目のフィールドスタディーの中で地域づくりについてとりあげ、全国で進められている事例研究や自分たちのまわりの社会課題解決のための手法を学び、将来、社会に出た後も、市民として様々な社会課題を自分事として捉え、参画してくれることを期待するものである。

2017年度から、これらのスキルをもとに、本学の学生、教員、地域市民の有志メンバー共働での定期的な防災イベント開催を進めている。

－参考考文献－
リンダ・グラットン（2016）『LIFE SHIFT』東洋経済新報社
山崎亮（2016）『縮充する日本「参加」が創り出す人口減少社会の希望 』PHP新書

小児における食物アレルギーに関する意識調査と実態調査

Investigation of Food Intake and Home Cooking of Children with Food Allergy

松本　晃裕 [1)]　目黒　美葉 [2)]　永倉　俊和 [3)]
Akihiro MATSUMOTO　Miwa MEGURO　Toshikazu NAGAKURA

山崎　芳江 [4)]　名倉　秀子 [1)]
Yoshie YAMAZAKI　Hideko NAGURA

1) 十文字学園女子大学・食物栄養学科　2) 国際栄養食文化健康研究所　3) 用賀アレルギークリニック
4) 十文字学園女子大学大学院・人間生活学研究科食物栄養学専攻

背景及び目的

近年、小児における食物アレルギーの患者数が増えてきており、また症例によってはアナフィラキシーショックなど重篤な症状を呈する患者も多くなってきた。

そこで本研究では、ある都内の小児アレルギークリニックにおいて、そこを受診している食物アレルギーを有する小児（小学生、あるいは小学校に入る前の乳幼児）の保護者を対象としてアンケートを行い、その意識調査や実態調査などを行った。

方法

食物アレルギーをもつ61名の小児の保護者にアンケート調査を行った。

結果

- 原因物質としては卵、乳製品、落花生、小麦、ソバが多かった。
- 症状は皮膚の痒み・赤み、蕁麻疹、口腔アレルギーが多かった。
- 12％の小児において、血圧低下などのショック症状となるアナフィラキシー症状があった。
- レストランの利用が多く、全体の90％の小児が月に１回以上レストランを利用していた。
- 約40％の保護者が外食利用時に困った経験があった。
- 約70％の保護者が外食や総菜購入について満足していた。
- 子どもが間違って除去食物を食べてしまう事を心配する保護者の割合は半数以上であった。
- 逆に誤って除去食物を食べさせてしまう心配をしている保護者は少なかった。

総括

- 食物アレルギーについての情報が日本の社会に浸透し、スーパーなどの惣菜にアレルギー表示が増えている。またアレルギー対応をするレストランが多くなっているものの、食物アレルギーを持つ子どもやその保護者からみるとまだまだ問題点は多いと感じていることが分かった。
- アレルギーを持つ小児が安心して色々な外食が出来るような状況になるためには更なる多くの改善が必要であると考えられた。

新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導

Evaluation of exercise capacity and food intake in regional residents and students in Niiza City

岡本　節子 [1)]　Setsuko OKAMOTO
松本　晃裕 [1)]　Akihiro MATUMOTO
長澤　伸江 [1)]　Nobue NAGASAWA
福田　平 [2)]　Taira FUKUDA
佐々木亮太 [3)]　Ryota SASAKI
肥沼　謙 [3)]　Ken HINUMA
柴山　桂 [3)]　Kei SHIBAYAMA
石山　隆之 [3)]　Takayuki ISHIYAMA
池川　繁樹 [4)]　Shigeki IKEGAWA

1) 十文字学園女子大学・食物栄養学科　2) 国際栄養食文化健康研究所
3) 十文字学園女子大学・次世代教育推進機構カレッジスポーツセンター　4) 十文字学園女子大学・健康栄養学科

キーワード：　全身持久力　最大酸素摂取量　ヘルスプロモーション
食事調査　エネルギー摂取量

要旨：新座市地域住民と十文字フットボールクラブの選手を対象に、地域住民のヘルスプロモーションを推進させるために、最大酸素摂取量測定により全身持久力を評価した。また、十文字フットボールクラブの選手には食事調査を行い、栄養に関する課題を提示した。全体的に脂質が多く、炭水化物が少なく、鉄は不足していた。特に大学生は生活状況の多様化から食事摂取状況に影響を及ぼしていると考えられた。

1. はじめに

平成26、27、28年度において新座市地域住民と十文字フットボールクラブの選手を対象に、運動中の酸素摂取量、心電図、血圧測定を行うことにより、住民や選手が運動をする場合に、医学的な問題がないかどうかのメディカルチェックを行い、また最大酸素摂取量測定により全身持久力を評価した。これらのデータを利用して健康増進のための運動指導や食事指導を行うことにより、地域住民の健康への関心がさらに高まり、この地域住民のヘルスプロモーションを推進させることが可能となる。

十文字フットボールクラブの選手には、本事業で測定した最大酸素摂取量や食事調査からトレーニングの質や量の調整を行い、競技力の向上や傷害の減少を目指している。本年度は従来の研究の継続と、インピーダンス法やエコー法による全身の筋肉量、筋肉厚、骨密度等の測定を行い、より詳細な体組成や身体機能の検討を行った。十文字フットボールクラブは、昨年度は全国優勝を果たし、将来を期待された高校生のトップクラスの選手が所属している。サッカー選手にはシーンごとの身体の動きに俊敏性が必要で、瞬発力が求められ、さらに90分間走り続ける持久力が必要である。瞬発力を養うには筋力が必要であり、全速力で走ったり踏ん張ったりするとき

には全身の筋力を使う。日本代表選手クラスになると、試合で13キロも走るといわれており、ダッシュをしたり、ゆっくり歩いたりと緩急を織り交ぜた走り方のため、疲労感が増大する。

また、サッカー選手は、ひざや足首などの間接の痛みや軟骨、靭帯の損傷、太ももの肉離れなど筋肉系の怪我が多く、足小指の骨折などもみられる。適切な治療を受けるとともに、食事による怪我の予防、早期回復を図る必要がある[1)]。そこで、優れたサッカー選手を栄養面からサポートすることを目的に、学生と共に食事調査、身体状況の調査を行い、個人成績表を作成して返却をした。十文字フットボールクラブの選手の栄養に関する課題を提示して食事指導を行うことにより、十文字フットボールクラブの選手が食事への関心が高まり、パフォーマンスの向上につながることを期待して、今回の調査を行った。

2. 活動報告

地域住民と十文字フットボールクラブの選手を対象に、運動中の最大酸素摂取量を測定し、全身持久能力を評価する。同時にインピーダンス法やエコー法による全身の筋肉量、筋肉厚、骨密度等の測定を行った。十文字フットボールクラブの選手を対象に、十文字学園女子大学の学内に集合してもらい、大学生にはその場で調査項目の説明を行い、同意を書面で交わした後に、身体状況等の質問用紙に記入を依頼し、高校生には保護者の同意を書面で交わした後に身体状況等の質問用紙を自宅で記入してきてもらい回収した。また、3日間の食事調査に関する事項は学生が説明を行い、食事記録表を配布し、食事の写真のメール添付を依頼した。10日後に十文字フットボールクラブの練習前に学生が調査用紙を回収し、食事の写真と食事記録表から栄養価計算を行い、個人成績表を作成した。2ヶ月後に十文字フットボールクラブの選手に個人成績表を配布し、食事内容のアドバイスを行った。十文字フットボールクラブのコーチからは、フットボール選手の練習後の補食について選手へアドバイスがほしいとの意見があった。

3. 十文字フットボールクラブの選手の3日間の食事調査の結果と考察

食事記録表、身体状況等用紙を回収した。食事の写真と3日間の食事記録表から栄養素等摂取量を算出し、3日間の平均栄養素等摂取量を以下の個人成績表にまとめた。

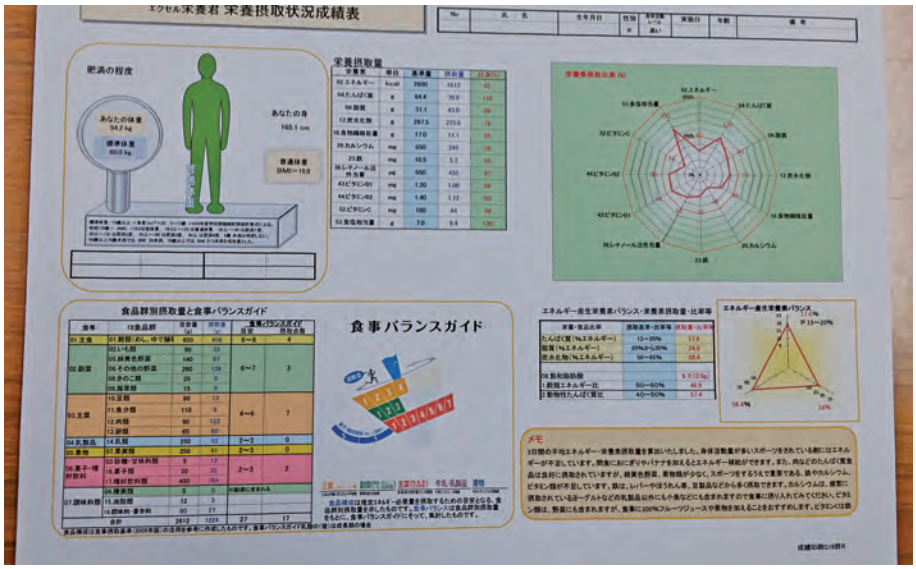


図1．個人成績表

個人成績表を十文字フットボールクラブの選手に返却したところ、自身のエネルギー摂取量等には関心を寄せていた。大学生、高校生の選手はいずれも平均エネルギー摂取量は、推定エネルギー必要量（大学生2,200kcal ／日、高校生2,550kcal ／日）「日本人の食事摂取基準2015版より」を下回っていた選手もいた。また、脂質の摂取量が多く、炭水化物が少ない選手もいた。

大学生は朝食、昼食などを簡易に済ませている傾向がみられ、夕方はアルバイトをしている学生や、一人暮らしの学生もいることから、生活状況の多様化から食事摂取状況に影響を及ぼしていると考えられた。高校生は自宅から通っている選手が多く、摂取エネルギーが2,900kcalを超える選手もいた。

カルシウムについては、意識的に摂取している高校生もいたが、鉄については、食事からの摂取では足りていないことから、カルシウム、鉄を多く摂取できる料理の提案等が必要と考えられる。

4. 今後の課題

食事調査の結果から、十文字フットボールクラブの選手の栄養に関する課題を提示して、選手のパフォーマンスにつながる栄養面のサポートを行っていきたい。現在、練習後の補食に関するパンフレットを作成中であり、選手に配布し、集団指導も予定している。十文字フットボールクラブの選手へ個別に栄養サポートができる体制を確立していきたい。

<参考文献>
1）川端理香著　勝てるカラダを作る！サッカー選手の栄養と食事　株式会社大泉書店

地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み

Activities for the practice of the dementia café by community cooperation

野島　靖子 1)　Yasuko NOJIMA
名塚　清 2)　Kiyoshi NAZUKA
太田眞智子 1)　Machiko OTA
山口　由美 1)　Yumi YAMAGUCHI
富井　友子 1)　Tomoko TOMII
二瓶さやか 1)　Sayaka NIHEI

1) 十文字学園女子大学・人間福祉学科　2) 十文字学園女子大学・地域連携推進機構

キーワード：　地域　高齢者　認知症　居場所　カフェ

要旨：平成28年度地域連携共同研究所の「地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み」プロジェクトは、大学と新座市、大学近隣の高齢者相談センター・自治会長・民生委員との連携により、また、福祉系学生との協働による、介護相談もでき、誰でもが参加できる高齢者と介護者の居場所づくりである。「認知症カフェ」を意識して始めたものであるが、認知症という言葉を使用せずに、誰でもが集えるカフェとして実施している。結果、毎回、介護実習室で行えるぎりぎりの人数である36 ～ 37名の方の参加があった。参加者からはおおむね好評の意見を寄せられた。運営には、人間福祉学科の学生も参加した。実習を経験した学生であったこともあり、参加者とのコミュニケーションがスムーズで、参加者の方々より高評価をいただいた。

地域の方々、行政、大学教員、人間福祉学科学生の協働によるカフェの運営は、地域連携の上でも学生の学びから見ても大変有意義であると考える。

Ⅰ　はじめに

我が国における認知症の人の数は2012（平成24）年で約４６２万人、６５歳以上高齢者の約７人に１人と推計されている。軽度認知障害(MCI: Mild Cognitive Impairment)と推計される約400万人と合わせると、65歳以上高齢者の約４人に１人が認知症の人又はその予備群とも言われている。高齢化の進展に伴いさらに増加が見込まれており、2025（平成37）年には認知症の人は約700万人前後になり、65歳以上高齢者に対する割合は、じつに５人に１人になるという予想が出されていて、超高齢者社会を迎えるにあたっての大きな課題であると言われている。

いわゆる団塊の世代が75歳以上となる2025（平成37）年を目指し、認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会をめざし、厚生労働者は2012（平成24）年「認知症施策推進５か年計画」（オレンジプラン）を策定し、さらに2014（平成26年）1月「認知症施策推進総合戦略～認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて～」（新オレンジプラン）が策定された。新オレンジプランには７つの柱があり、その一つに、認知症の人や家族、支援する人たちが参加して、話し合い、情報交換を行う方法の一つとして「オレンジカフェ」の設置の推進がある。

本研究である「地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み」を計画した平成28年度当初においてN市で定期的に開催されている「オレンジカフェ」は南部地域にNPO法人が運営している1カ所のみであった。現在は市内の北部にある病院が運営を始め1カ所増えて2カ所となっている。南北にひろがるN市の地域特性を考えると認知症の人や介護者が容易に通える状況ではないといえる。今後、N市に定期開催できる「カフェ」を増やし、認知症の人や介護者が容易に通える場所を提供することは重要であり、その場を大学が提供し、行政や地域の方々と共に運営することは地域連携事業として大変有意義なことであろうと考えた。さらに、人間福祉学科の学生と共に協働して運営に参画していくことは学生にとっても貴重な経験であり、専門性の向上の一助になるであろうことが推察された。

Ⅱ　活動報告

カフェ開催の準備として地域包括支援センターとの連携が必須であると考え、大学近隣の高齢者相談センターのソーシャルワーカーにプロジェクトメンバーへの参加について依頼した。カフェ運営準備委員会を立ち上げる前段階として、県内にあるカフェを訪問し参加させていただき、現状を担当の方にお聞きした。

また、N市役所の認知症カフェ担当部署を訪問し、N市のカフェに関する情報をお聞きし、地域連携共同研究所の事業としてカフェを開催する旨の説明とご協力の依頼をし、プロジェクトメンバー派遣についてもお願いした。続いて、大学近隣の自治会長及び近隣にN市民生委員・児童委員協議会会長が住まわれているとのことで、参加していただいた。第1回のカフェを開催する準備として、運営準備委員会を3回実施した。

1　運営準備委員会の開催

（1）第１回運営準備委員会

日時：平成28年8月5日　10時～ 11時30分

①コーヒー、紅茶、クリームソーダ等提供予定の飲み物やカフェの流れ等について提案した。飲み物はお替り自由の飲み放題で参加費は100円いただくこととし、有料で行うこととした。開催場所については、外部で実施する案など色々な案もあったが、水を使用する流しや調理台があり、車いすの方でも使用できるトイレがあることなどから大学の介護実習室で行うこととなった。

②カフェの名称については、「ほっとカフェ十文字」という案を採用し、後に正式名称を「ほっとカフェ＠十文字」とした。「＠マーク」をいれることにより、モダンな雰囲気ともなった。厚生労働省により認知症カラーとしている、「オレンジ」カフェという案もあったが、オレンジや認知症の言葉を入れると、気軽に参加しにくくなることから、これらの言葉の使用は不採用となった。地域連携共同研究所事業ということで、対象を特に「認知症の人」と限定するのでは無く、「誰でもが自由に集える居場所づくり」ということとした。

③カフェ開催日程について・・第1回目は、11/7（月）午前中で決定し、第2回は2月頃を予定することに決めた。

（２）第２回運営準備委員会

日時：平成28年9月12日（月）　14時10分～ 15時40分

①「K市地域包括支援センター Y」のカフェ担当者の方に認知症カフェについてのお話をうかがった。

K市は2013年1月から認知症カフェを開催している市で、埼玉県でも積極的に取り組んでいる先駆的な市である。

認知症カフェの概要や開設当時のお話や工夫した事、注意すべき点等についてお話頂き、質疑応答。

オレンジカフェを開催している地域包括支援センターはオレンジカフェの普及についての活動も業務の一つとして位置付けられているとのことで、K市の了承を得て業務として来校した為、講師謝礼については辞退された。この時初めて地域包括支援センターのソーシャルワーカーの業務範囲の大きさについて改めて知ることとなった。

誰でもが楽しみながら・・と
お話しくださいました

夏の暑い間に準備しました

（３）第３回運営準備委員会

日時：平成28年10月3日（月）　9時30分～ 10時20分

11月７日開催の認知症カフェについて

①当日の流れ・必要物品について確認、担当決め等を行った。

②蒸しパンの生地を作り、参加者に型抜きしていただき、蒸し器で蒸すことになった。

次回認知症カフェ開催予定

・第２回カフェ開催の日程を平成２９年２月３日（金）と決めた。

２　「ほっとカフェ＠十文字」の開催

（１）第1回　日時：平成28年11月7日（月）　10：00 ～ 12：00

参加者：地域高齢者等37名

スタッフ：プロジェクトメンバー　12名　　学生　10名

当日の流れ

学生を受付や蒸しパン作り、飲み物の注文受付や、飲み物作りなど各グループに配置し、

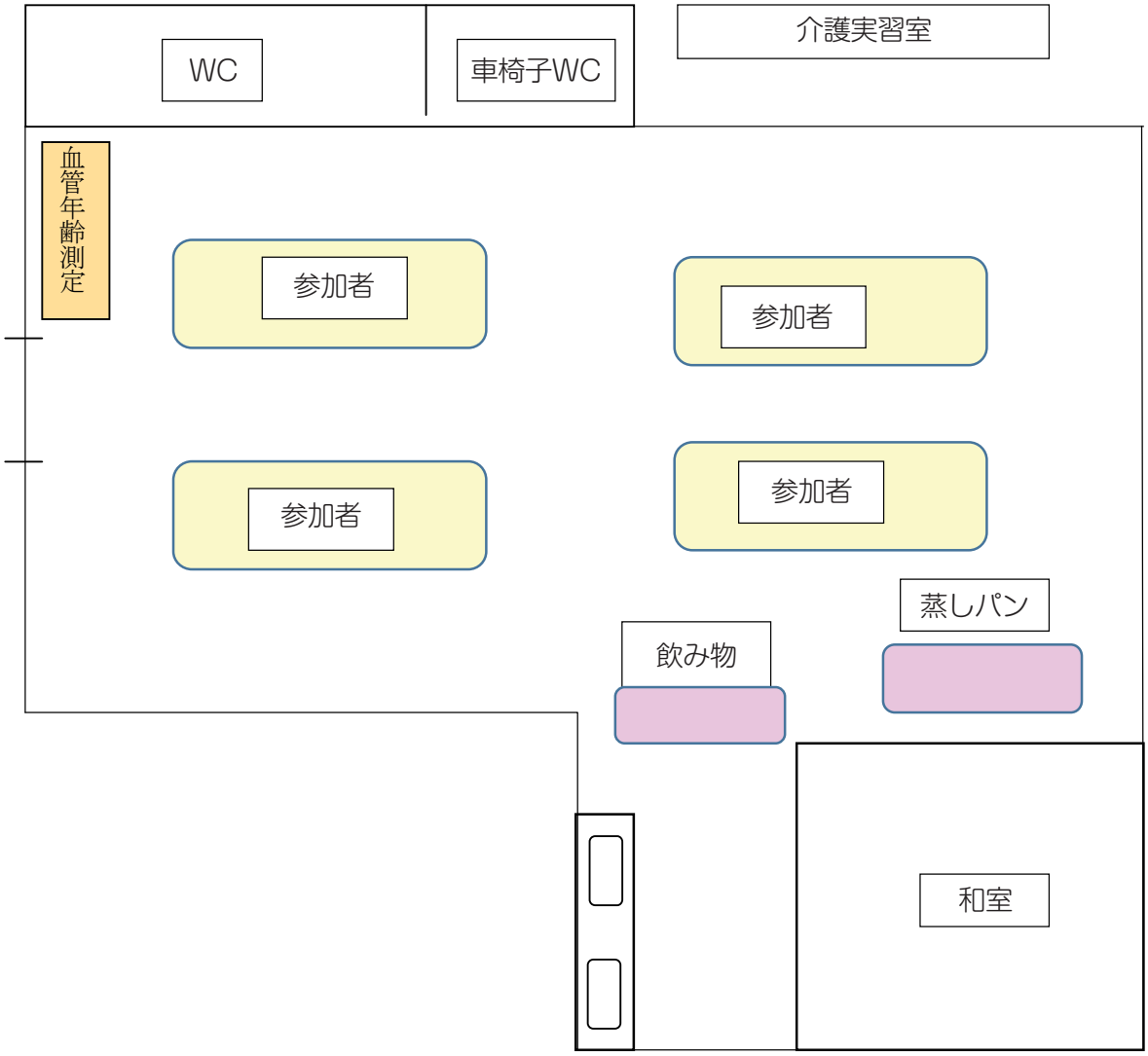
教員も各一名配置した。

①飲み物・・11月という気候を考え、ココアや甘酒など暖かい飲み物を多めに用意した。

②蒸しパン作り・・N市民生委員・児童委員協議会会長のＳ氏が麺ののし板等を用意してくださった。S氏が見本に生地を作り、学生も指導を受けながら生地を作ることができた。名前がわかるようにクッキングシートに参加者各自に鉛筆で氏名を書いてもらった。好きな形で型押した生地をクッキングシートに載せて蒸し器で蒸し、出来あがった蒸しパンをそれぞれに再配布した。生地の回収や、型押し、再配布などは学生が中心となり、積極的に行動した。

③血管年齢測定・・市の血管年齢測定機をお持ちいただき、測定した。参加者は、実年齢より若いと大喜びであった。

④健康体操・・簡単な健康体操をした。



※上記のようなレイアウトにし、介護実習室は普段、丸椅子である為、普通教室を事前に確保し、朝、机といすを運んだ。冷蔵庫は教員の研究室から小型の冷蔵庫を運び使用した。

学生は実習用のエプロンを使用し、スタッフ用に淡いオレンジ系のエプロンを用意した。

蒸し器・押し型等は、以前教員が研究費で購入したものを使用し、不足分はS氏が個人のものを持参してくださった。

Caféの看板紹介
学生が作りました

カフェ開始にあたり、自己紹介

蒸しパン作り

血管年齢測定は楽しそうでした

ハートの型の蒸しパンができました

高齢者相談センターの方の自己紹介

（2）第2回　日時：平成29年2月3日（金）　13：30 ～ 15：30

参加者　：　地域高齢者等36名

スタッフ：　プロジェクトメンバー　12名　　学生　10名

当日の流れ

前回と同様に、学生と教員がチームを作り、それぞれに配置した。

①飲み物・・　2月という季節柄、やはり、甘酒等暖かい飲み物がよくでた。

②骨密度測定・・前回の血管年齢測定はとても希望者が多く、楽しそうでした。2回目は市から骨密度測定機をお持ちいただき、測定した。

③朗読・・本学図書館の職員の方が、読み聞かせのボランティアをされているとのことで、葛飾北斎の仕掛け絵本、はらぺこあおむしなどの本を読んでくださった。

④健康体操・・　健康体操は、体育系の学科卒の本学の教員が担当した。

暖かい飲み物がたくさん出ました！

本学図書館職員による北斎の仕掛け絵本の読み聞かせが好評でした

2回目は骨密度測定でした

健康体操をしました

学生の感想から

・30人以上の方が参加してくださりとても賑やかで、参加した皆さんに楽しんでいただけたと思う。また、好きな飲み物が選べたり、テーブルもきれいに装飾していたことで、喫茶店のような雰囲気で、私自身もその空間にいてとても落ち着き、初対面でも緊張することなく、同じテーブルの方々と会話することができた。このような場所が、地域にあることでそこに暮らしている方々の気持ちのよりどころになることを、改めて実感した。

・今回初めて認知症カフェの開催に携わり、滞りなく進行できるか不安だったが、多くの高齢者の方が来てくださって、飲み物を飲みながらお話やレクリエーションを楽しんでいる姿が見受けられたのでとても嬉しかった。私は蒸しパン作りを担当していたのだが、参加者の方に型抜きを手伝っていただいてパンを作ることを知り、実際にやってもらうと、型を選んで抜く作業を笑顔で行っていることが印象的で、小さなことでもこのように一緒に作業ができてそれが形になると、参加者の方も、より楽しくなったのではないかと感じた。

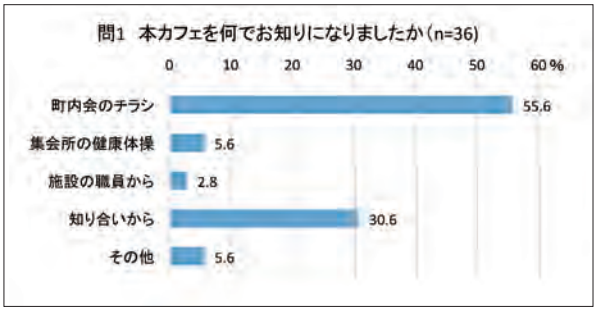
3　第2回「ほっとカフェ@十文字」参加者アンケート

第1回は初めての試みであり、参加者の方々に負担をかけずに楽しんでいただきたいという思いもあり、アンケート調査を実施しなかったが、第2回については、地域連携共同研究所事業ということを考慮し、アンケートの協力を依頼した。

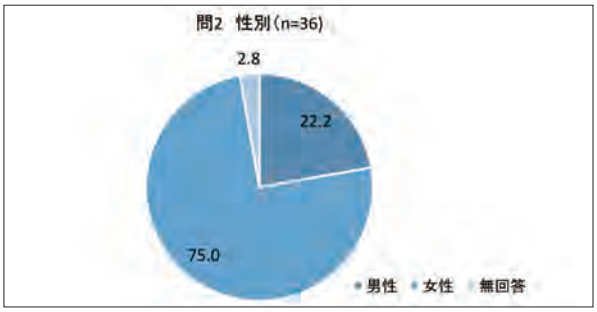
(1)アンケート結果

参加者の方にアンケートのご協力をお願いしたところ、36名全員に提出いただいた。アンケート調査の内容は、①カフェ開催を知った経緯、②性別、③年代、④住まいの地区、⑤本日のカフェについて、⑥自由意見、⑦今後への希望　の7点であった。⑥及び⑦については、自由記述とした。

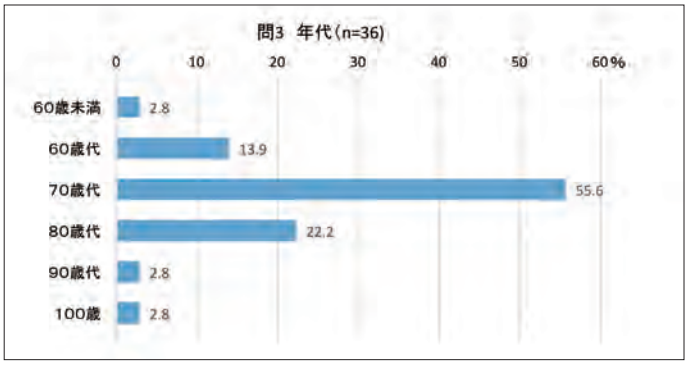
①「カフェ開催を知った経緯」については、「町内会のチラシ」が最も多く20名55.6％、次いで「知り合いから」が11名30.6％、「集会所の健康体操」が2名5.6％、「施設の職員から」が1名2.8％、「その他」が2名5.6％であった。



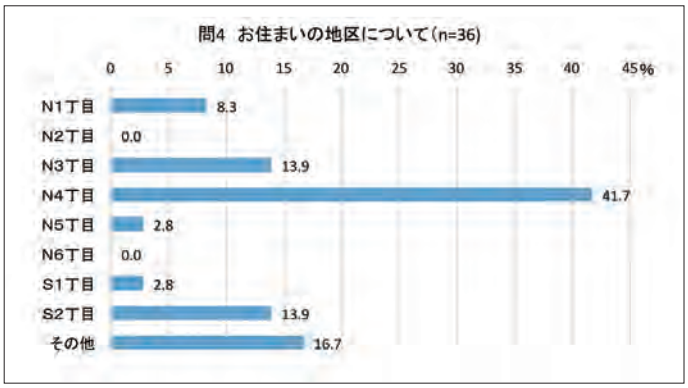
②「参加者の性別」については、「女性」が27名75.0％、「男性」が8名22.2％、「無回答」1名2.8％であった。



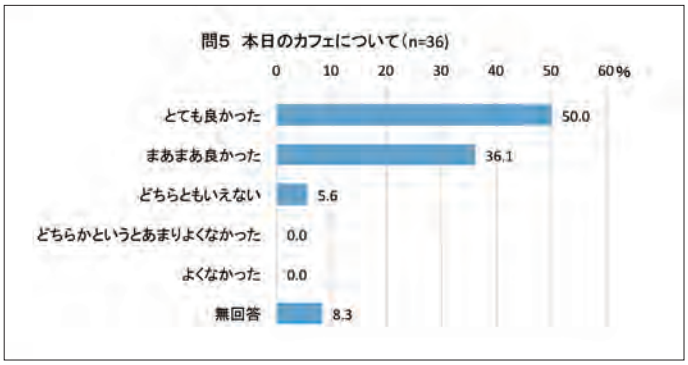
③「年代」については、「70歳代」が20名55.6％で最も多く、次いで「80歳代」が8名22.2％、「60歳代」が5名13.9％、「60歳未満」が1名2.8％、「90歳代」が1名2.8％、「100歳」が1名2.8％であった。



④「住まい」については、大学から駅に向かう周辺の地区である「N地区4丁目」が15名41.7％で最も多く、次いで「N地区3丁目」と「S地区2丁目」がともに5名13.9％、「N地区1丁目」が3名8.3％、「N地区5丁目」と「S地区1丁目」がともに1名2.8％、「その他」が6名16.7％であった。



⑤「本日のカフェについて」は、「とてもよかった」が18名50.0％、「まあまあよかった」が13名36.1％、「どちらともいえない」が3名5.6％、「無回答」が3名8.3％であった。



⑥「自由意見」については、まず、「学生の参加」について肯定的な意見が多く寄せられた。「若い方と話が出来ると嬉しい」「学生さんの心温まる本当に良い時間を頂いた」「生徒さん達の笑顔が嬉しかった」「生徒さんの親切心を頂いてよかった」等の意見があった。

次いで「読み聞かせ」について、「今回朗読は楽しめた」「はらぺこあおむしもとてもよかった」「しかけ絵本よかった」「朗読は楽しかった」等の意見があった。

「健康体操」について、「声を出す運動が良かった」「リハビリ健康体操がよかった」「脳体操がよかった」等の意見があった。

また、「大学が地域に開かれた大学として、このような催しをすることは大変けっこうなことだが、私が求めるものとは違うので今後は参加しない」という意見もあった。

⑦「今後への希望」については、「折り紙等手作りできるもの」、「歌を唄う」、「楽しい音楽会」、「認知症についての講和」等のご意見があり、「今のままで楽しいです」という声も聞かれた。

４　考察

第1回のカフェにおいて、初めての試みということで、参加者の人数が把握できないことから、当日参加も構わないが、ファックスによる事前申し込みをできるようにチラシの裏に申込用紙を印刷した。開催の数日前までは、10名程度の申し込みであったが、前日申込みや当日参加者も多く、結局36名の参加であった。

第1回目を終えて、幾つかの課題が出てきた。まず、会場であるが、介護実習室では人数的に余裕がなかったことが挙げられた。2回目にあたり他の教室等を検討したが、水回りなどを考え、引き続き介護実習室で行うこととなった。参加者の机と椅子については、当初運びやすいということから、新しい教室にある折り畳み式のキャスター付きのものを用意したが、キャスター付きの椅子が高齢者の方には動いて不安定であったため、歩行が不安定な方には、キャスターのついてない椅子と途中で交換していただいた。2回目開催時には初めから、折りたためる机とキャスターの無い安定した椅子を全員分用意した。

飲み物とお菓子については、暖かい飲み物が不足しがちであったり、お菓子が途中でなくなってしまい、もっとあったほうが良いという意見があり、第2回は余分に用意した。しかし、2月という時節柄甘酒等の温かい飲み物に注文が多くあった。第1回にコーラを用意したが、コーラの希望者はなく、第2回はメニューに入れなかった。

開催の時間帯については第1回は午前中に実施し、第2回については近隣の集会所の健康体操が金曜日の午前中に行われているため、その日の午後にという意見があり、金曜日の午後に実施したが、健康体操の後は疲れてしまい、参加しにくいという意見もあった。

第1回の高齢者相談センターの方の相談コーナーを和室としたが、これは大失敗であった。
和室は蒸しパンや飲み物コーナーの奥にあり、さらに50センチほど高くなっている為、高齢の方が相談するには適切ではなかった。第2回は、心理学科のカウンセリング面談室をお借りした。このことは、高齢者相談センターのソーシャルワーカーの方にも、高齢者の方にも大変申し訳ないことであったと考えている。

アンケート結果から考察を試みると、「カフェ開催を知った経緯」において回答が最も多かった「町内会のチラシ」であるが、プロジェクトに参加していただいたＮ４丁目自治会長のT氏のご尽力のおかげであると言える。他のチラシ配布が回覧方式であったのに対し、T氏が戸別配布を試みて下さり、さらに、自治会の役員会で宣伝をしてくださった。その結果全体の参加者の４１％がＮ４丁目の住民の方であった。さらに、参加者が多かったのは民生委員協議会会長のS氏がお住いのＮ３丁目、本学の近隣地区であるＳ２丁目にはチラシの回覧を依頼した。高齢者の方への周知は町内会経由が有効であることが改めて知ることができた。

「性別」で第1回の男性参加者は１人であったが、第2回において8名22％が男性であったことはとても良いことである。男性にも参加していただけるカフェとなったと捉えることができる。

「年代」で、100歳の方は近隣のケアハウスに居住されている方であった。100歳で大学まで徒歩で来られ、「楽しかった」とおっしゃっていただけた。

「本日のカフェについて」の回答では、「とてもよかった」「まあまあ良かった」を合わせて、31名86.1％の方が、「よかった」と回答されている。第1回の参加者36名のうち11名がリピーターとして第2回も参加されており、大学近隣地区においてこのようなカフェについて需要があり、今後も続けていく必要があると考えられる。

Ⅲ　取り組みの成果及びまとめ

オレンジカフェは本来的には、認知症の人や介護者においでいただくことを意識して開催したものである。しかし、認知症という言葉を使用すると参加しにくくなるということから、名称を「ほっとカフェ＠十文字」とし、認知症という言葉も第1回のチラシには全くなく、2回目で「認知症の介護でお悩みの方も」という文言が入っているのみである。2回のカフェは、認知症というよりは高齢者の為のサロンカフェであった。しかし、結果としてカフェの参加者が、地域連携共同研究所の別の研究事業である「認知症ケア講座」に参加されたり、ご近所でも名前を知らない方同士が親しくなったりと、地域連携の重要性を実感する場となった。

参加者は地域の高齢者だけでなく、市議会議員の方が要介護の親族がいらっしゃるとのことで参加され、地域の自治会会長の方、民生委員の方、福祉の専門職の方、カフェに関心のある方など、個々に尋ねることはしなかったが、様々な方が様々な立場で参加されている様子が窺えた。ご夫婦で参加されている方もいらした。

学生の取り組みについてここで、ぜひ触れたい。第１回のカフェに参加した学生１０名は、全員が社会福祉実習、あるいは介護実習、もしくは介護福祉士と社会福祉士と両方の資格実習を終え、就職も決まっていた４年生の学生達であった。それぞれが、割り当てられた業務をこなしながらも積極的に参加者に声をかけ、困りごとがないかなど確認をしていた。一方で冗談を交えながら参加者のお話をお聞きし、コミュニケーション能力は素晴らしいものがあった。2回目の参加者アンケートにおいても、参加者が学生との関わりを大変喜ばしいものととらえていることを知ることができた。これらは人間福祉学科の４年間の学びの結果であると感じている。

カフェ開催については、10年程前、人間福祉学科が開設してそれ程経過しない頃から、一部の介護系教員の間で開催できないかと話をしていたものの、場所や広報、費用などの関係で実現できないままになっていた。この度地域連携共同研究所事業として、市役所関係者及びN市民生委員・児童委員協議会会長をはじめとする民生委員の方々、自治会長、高齢者相談センターの方など多く地域の関係者の方々のご協力のもとに実現できたことについては、大変うれしく、又研究所の皆様に感謝申し上げます。

「想いの共有」から始まる大学の地域“共創”
―当事者意識が“心の種火”を自信に変える―

Regional "co-creation" of the university starting from the "Sharing feelings"
- the consciousness of the parties turns "mind fire" into self-confidence -

福島　聡
Satoru FUKUSHIMA

十文字学園女子大学・地域連携共同研究所、プラスキャンパスプロデューサー

キーワード：　地域連携　ＣＯＣ　社会体験　アクティブラーニング　対話

要旨：本学ＣＯＣは、地域社会の課題解決と社会体験を通じた学生育成を大きな2つの柱とするが、一方、地域課題は輻輳化して簡単に一分野を切り出すことが困難となり、学生の育成では、未来の予測不能性が高まり、変化に即応できる新たな人間像が求められている。また、国連ＳＤＧｓ（Sustainable Development Goals＝持続可能な開発目標）に見られるように、いまや地域の未来も世界共通の課題を無視して考えることはできない。大学の地域連携も、社会の文脈の中で自ら成長を続けていける学生育成の仕組みづくりが求められる。

1. はじめに

平成26年度に本学ＣＯＣ事業が開始したのを機に、報告者は地域連携推進機構（ＣＯＣセンター）プラスキャンパスプロデューサーとして着任し、以後、地域連携共同研究所、ボランティアセンターなど、３年間にわたり地域と大学との橋渡しや相談対応、共同企画の実施、さらには学生と地域活動に同道して汗を流すなど、かなり“よろず屋”的な活動をしてきた。結果、地域の意見や要望、教職員の意識、学生の感想などをじかに知る機会にも恵まれた。

本学建学の理念にある「身を鍛へ　心きたへて　世の中に　立ちてかひある　人と生きなむ」を、「自ら人生を切り拓いて生き抜く力を身につけ、社会の当事者として行動する意思をもった人間となるべく努力する」と解釈するならば、ＣＯＣ事業の両輪である地域課題解決と学生育成は、相互に連関し生涯にわたって行動と省察の往還によって社会参加と自己変革を続ける能動的人間を育てることにほかならない。

地域課題を大学が解決し地域社会に学生を育ててもらう地域連携は、本来なら、地域と大学が「Ｗｉｎ-Ｗｉｎ」の関係を維持継続できる礎となるはずのものだが、現実的に運用していく途上で、いくつかの課題も表出してきた。あえてざっくりとあげるなら、地域社会は住民ひとりひとりの人生の集合体であり、構造的・機能的な組織とは異なるため、大学もそれなりの準備と覚悟が必要なのではないか、ということである。

2. 状況

地域連携に関係する項目を提示してみた。①を除き、原則として報告者の実体験および学内（教職員、学生）、地域（住民、行政、民間）、外部（他地域の実践者、研究者等）からの聞き取りをもとにしている。

①社会的要因

・18歳人口の減少　・新卒者離職率の高さ　・グローバル化　・予測不能性の増大

18歳人口の減少は、社会活力の縮減につながりかねず、より能動的で新しい発想のできる学生の育成が求められる。新卒者離職率の高さは、企業の求める人材と現在の大学が送り出す新卒者に乖離がある証左ともいえ、地域連携による「社＝大接続」を考えるべきだろう。グローバル化、予測不能性の増大は、体験を通じての包摂性の理解とともに、変化に即応できる現場力のある人材育成の視点が必要となる。

②大学に関連する要因

・教育における地域連携の位置　・地域への情報発信　・信頼を基礎に置いた関係構築　・地域の教育力

地域連携が何を目標としているのか、参加するとどんなメリットがあるのか、いまだ地域も教職員も学生も明確なイメージを抱いているとはいえない。社会体験を教育に関連付ける以上、教員の個人的資質に頼るのではなく、専門分野との関連も考慮したうえで、誰が担当しても同一の質を保証できるカリキュラムとして開発すべきである。また、地域連携に熱心な教員ほど地域との付き合い等に時間を割くことになる。複数教員が同じ科目を標準化された同一の教材、指導法で連携をとりながら進めることで、孤立化を防ぎ、継続性および質の保証と改善のＰＤＣＡが可能となる。

情報発信は、本研究所が平成29年２月に学内カフェテリアで開催した第1回実績報告会の席上、住民から「大学の研究を初めて知った」「こうした機会をもっと増やして」等の意見が聞かれた。大学が思っているよりも地域は大学を知らない。地域科目の一環として、学生主催の実績報告会やプロジェクト提案コンペの開催なども考えられる。

地域と大学との思惑違い「こんなはずではなかった」の声は少なくない。特に事業継続をめぐる問題は、地域住民が将来にわたる付き合いを前提とするのに対し、教員が年度または半期で一区切りと考えた場合等に起こる。しかし、事情はあらかじめ説明可能であり、事前に学内外の構成メンバーによる対話の場を設け、忌憚なくモノ申せる信頼関係を構築しておくべきだろう。反対に、信頼関係さえ根底にあれば、多少の問題は乗り越えられる。また、地域の教育力に関しては、地域社会に漠とした期待を抱くのではなく、定義付けも含めあくまで大学が責任を持つ領域だろう。

③学生に関連する要因

・知識、情報の不足　・伴走者　・自己と社会との関連づけ　・振り返りと意欲づけ

「大学入学を機に何かやらねば」との“種火”を抱える学生は多いが、地域社会の情報や活動の基礎知識が不足している。また、事前・活動中・事後の振り返りも含めて、教員が学生の伴走者として継続的にフォローすべきと考える。学生は多くの場合、自分の体験を投げ出したまま単に非日常の体験として、「やばい」「超○○」「マジでよかった」などの一語で決着させる傾向がある。

自分の体験を自分の言葉で他者に説明し、さらに教員、他学生、地域関係者らと対話を重ねることにより、自分の行動を多層化して認識し、私的体験を社会に意味ある行動として文脈づけが可能となる。

④地域の要因

・課題の複雑化、全体化　・コミュニティの変容　・当事者意識　・場づくり

少子高齢化、空き家の増加、商店街の衰退、健康、街づくり、歴史・文化伝承など、多岐にわたる地域課題は、住民ひとりひとりの人生や人間関係と絡み合って存在する。血縁、地縁、利害関係等の網目が錯綜する複雑系ともいえる。そこへ乗り込んでいくとすれば、生身の人間関係に切り込むことになり、本気で取り組もうとする教員ほど覚悟と負担は増大する。一方で、対話を重ねることで丁寧に信頼関係を構築し、ともに地域の未来像を描いていく過程は、学生への教育効果ばかりでなく、地域の主役である住民にとっても地域課題をあらためて“自分ゴト”として捉えなおす機会にもなり、それこそ大学が地域社会の一員として存在する意義ともいえる。

3. 考察と提案

地域連携の目標が、複雑化する社会課題の解決と予測困難な時代を生き抜ける人間育成だとすれば、まさに「持続可能な社会づくり」の取り組みにほかならない。今後の方向性を考えると、まず、「地域からの要望→担当者とのマッチング→計画通りの活動→成果報告」といった行政的手法ではなく、「想いの共有」から始まる小さな実践を提案したい。具体的には、「地域・大学・外部専門家らによる対話→望まれる未来像を共有→できることから始める活動→成功体験→振り返り」を1つのサイクルとする。成功体験の多くない学生の場合、過去をもとに計画建てする手法（フォアキャスティング）より、関係者との対話をもとに「こうあってほしい未来像」を描き、「今できること」をコンパクトに実現していく手法（バックキャスティング）が適している。小さな成功体験の積み重ねが自信と当事者意識を生み、学びへの意欲を生み出す。

今後の地域連携に求められるのは、前提として地域と丁寧に対話をすること、いわば「土づくり」の発想ではないか。繰り返しになるが、地域社会は企業、行政、大学のような機能優先の組織ではない。地域の幸福とは、数値的な達成で実現できるものではなく、実感できる体験、心で感じる雰囲気、空気感や生活そのものである。農作業にたとえるなら、気候・風土・作物の特性を調べ、土づくり（対話＝セッション）を行う。そして作物を育てて収穫（活動＝アクション）した後も、次のための手入れ（振り返り＝リフレクション）を欠かさない。徐々にだが、豊かで美味しい野菜や果実が味わえるようになる。

この一連の流れを教員個人の資質や責任に収束させないために、カリキュラム化の検討が必要と考える。仮に「地域共創（ともづくり）学」としておく。全学共通科目として設置し、１クラス最大15名程度の少人数・対話型の授業とし、標準化されたカリキュラムに沿って5～6クラスを同時に展開する。習得すべき能力は「生き抜く意欲」「生き抜く力」「他者との共存」であり、自己評価は「世界を変えられる自分」「状況に応じて変われる自分」「他者と共存できる自分」などが考えられる。最終的には「自分から行動し始める学生」を目指す。ここでの教員は、一方的な知識の伝達者ではなく、ともに社会参画しともに歩む伴走者でもある。

①対話（セッション）

学生、教職員、地域関係者、外部の専門家らと対話の場を設け、「想いの共有」をもとに、バックキャスティングの手法で「あってほしい地域の未来」を描く。参加メンバーが互いの人間性を理解し、「何かができる」期待感のもとにチーム作りをする。

②できることから始める（アクション）

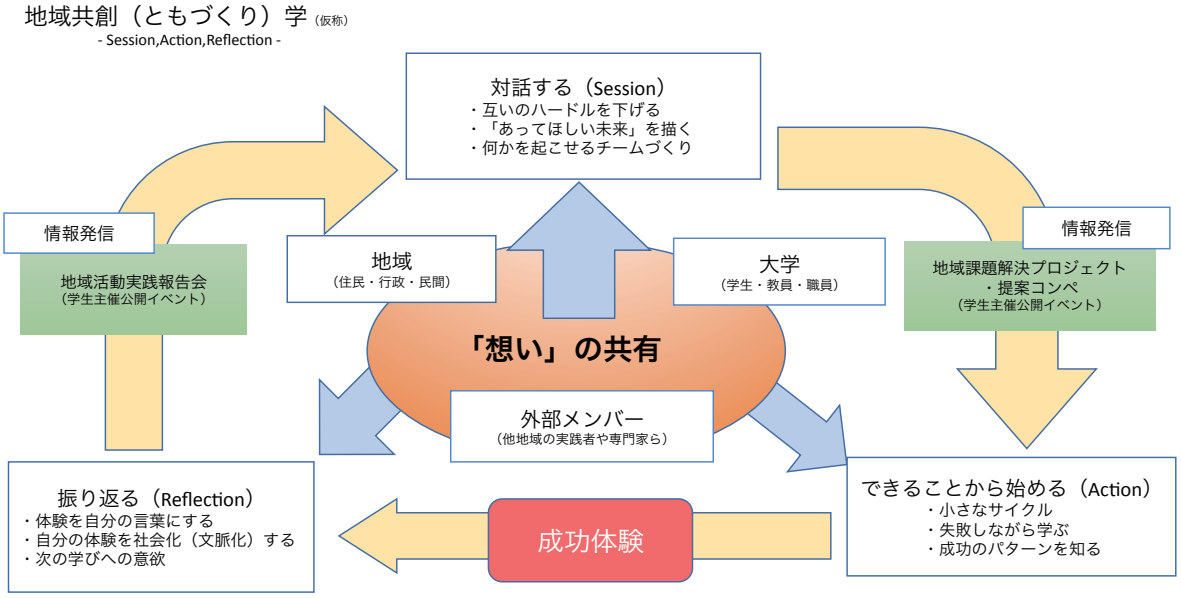
小さくても実行できることから始める。最小限の資源をもとに失敗から改善を重ねるリーンスタートアップの手法が適している。世界と組み合い、社会の多様性や自己責任に帰せられない構造的な問題に直面する中で、ひとつの小さな成功が自信となり周囲に良い影響を伝播していく。

③振り返り（リフレクション）

自分の心が動いた体験を自分の言葉で語る。活動が自己満足に終わらず、社会との連関の中でどのような意味があったのか、他者にどのような影響を及ぼしたのか、教員、他の学生、参加者との対話を通じて、気持ちの変化や成長を自覚し、さらなる学びの意欲につなげていく。

4. まとめ

「地域共創（ともづくり）学」では、教職員も、よりよい未来を目指す仲間として参加する。未知の状況に共にとまどい、紆余曲折しながら方向を模索するその過程こそが、生きた学びそのものといえる。履修後、さらなる意欲を持った学生には、新たな活動を支援する環境も必要となるだろう。学生の心の小さな“種火”を生きる自信に変えるチャンス、それが大学の地域連携であってほしいと切に願う。



編　集　後　記

地域連携共同研究所における、2年度目の年報をまとめることが出来た。各研究課題では、意欲的な取り組みが行われていた。

「食育で育む管理栄養士の専門性」では、食育イベント、ワークショップ、地域の健康講座に学生が参加し、専門的技術や知識を向上させたいと思う態度を養うことが出来た。

「十文字学園女子大学シニア健康教室」では、大学での研究成果を健康講話に盛り込むことで、地域とのつながりをより密にすることが出来た。

「新座・地域ケアのつどい」では、映画「あん」に関するアンケートに関して質的に分析することが出来、地域における大学の役割が再認識された。

「ワークショップによる合意形成の手法の開発とまちづくりサポートのスキーム構築に関する研究」では、まちづくりに関するワークショップや防災ワークショップに学生が参加し、学生が社会の課題と自己の課題を整理することが出来た。

「小児における食物アレルギーに関する意識調査と実態調査」では、保護者アンケートで意義深い結果が得られたが、フィールドの関係で次年度にはつながらなかった。

「新座市地域住民の全身持久力の測定と運動指導と食事指導」は平成26、27、28年度と続いている取り組みである。今年度はサッカー選手の栄養サポートにつなげることが出来た。

「地域との連携によるオレンジカフェ実践への取り組み」は、認知症という文言を使わず、地域の高齢者やそれを支える人々が誰でも参加できるという素晴らしい呼びかけによって成果を上げている。

「『想いの共有』から始まる大学の地域“共創”」では地域と大学がWin-Winの関係であるための要因を社会的要因、大学・学生・地域のそれぞれの要因に分けて整理されている。

2年度目の年報となるが、いずれも読みごたえのある報告で、より内容が充実してきたことを、喜ばしく思う。

地域連携共同研究所副所長　　加藤　則子

地域連携共同研究所

【運営委員】

志村二三夫　　学長・地域連携共同研究所所長
加藤　則子　　地域連携共同研究所副所長
福島　　聡
長澤　伸江
高橋　京子
松永　修一
岡本　節子
野島　靖子
本間　　修
近藤　秀二
安達美奈子

【事務局】

近藤　優子
古澤まゆみ
立神　安菜
安達　ふみ

十文字学園女子大学
地域連携共同研究所年報　第 2 号
2018 年 2 月 15 日発行

発　行　者　　十文字学園女子大学　地域連携共同研究所
発　行　所　　十文字学園女子大学　地域連携共同研究所
〒 352-8510　埼玉県新座市菅沢 2-1-28
TEL　048-477-0555　　FAX　048-478-9367
http://www.jumonji-u.ac.jp/
印刷・製本　　株式会社文化新聞社
埼玉県飯能市柳町 12-10